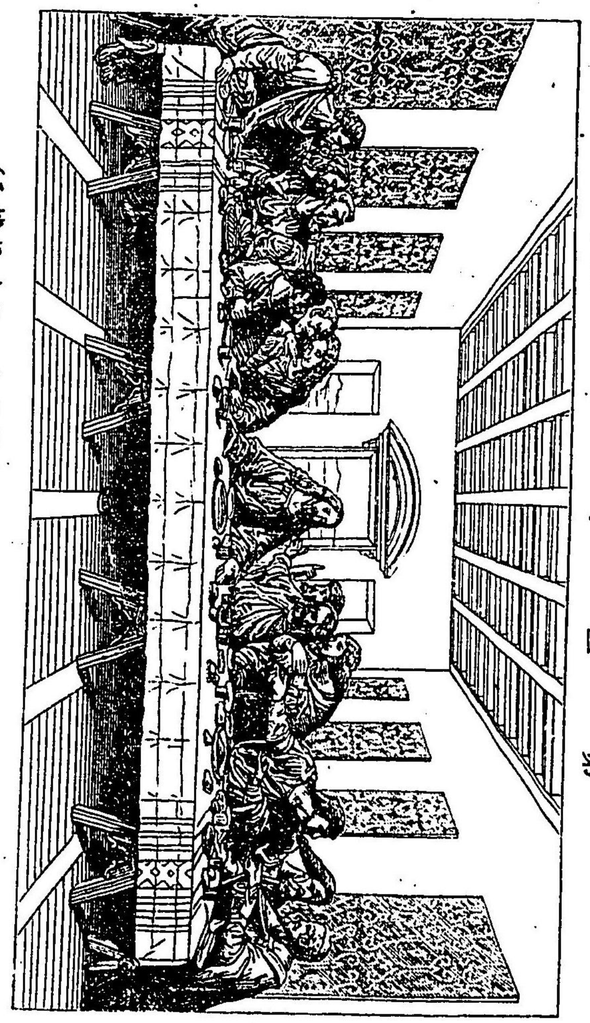
第十三圖



（ミラノにイヴィヴドルナオレ）食會の後最有名

たてや今は輔修すべからざるさまに毀損し了れり。佛蘭西人がミランを占領して、レオナルドの保護者たるルドヴィックスフォルザを囚繩しける時に際し、

此美術家は其國を去りて中央伊太利の地に逃走したり。彼はシーザーボルジアによりて技師の事に力を專らにしつゝフローレンスに住しぬ。千五百年に於て彼はモナリザテルヲヨコントの寫眞畫を描かんことを計れり。而して其後六十年にして、ヴアサリが『此寫眞畫をして人間よりも寧ろ神の作品たらしめたりし』が如き、快心なる其微笑は之を別とするも、猶且つ世界の最も巧妙なる美術家をして後へに瞠睹たらしむる一作たり』と云ひたりし處の此肖像に於て、謹勉の四ヶ年間を事に從へりき。此額たる、其他の時期が、「最上の聖母」と「基督の最後の會食」とによりて割せられたりし彼が天才に於ける最後の發展を表記するものとなす。

○千五百○三年、レオナルドダヴインシは、其他の舊殿なる廣堂側面の一方を裝飾すべく委任せられぬ、而して他の一方は實に後日に於て、ミケルアンジエロが描くべかりし也。其繪畫は實作されずして、其額は失はれたり。

レオナルドは「アンギアリの戰爭」を描出したりしも、吾人は今やルベンの描寫と、エデリンクの刻せるそが全體の一斷とによりて、只僅かにいとも不十

分なる概念を得るに過ぎざるのみ。是れ騎士爭鬪の圖にしてそが馬の形體は後世ジエリコールに至る迄、決して之より能く成されたるものあらざりし也。要するにヴインシは、其數多解剖學的の研究に於て、猶馬體のそれをも疎却せざりしことを了知し得。千五百十五年、フランソワ第一世は彼を促して佛蘭西に來らしめたりしが、彼は既に年老ゐて疲れつゝありたり、彼は就中、伊太利に於て成効しけるが如く運河開鑿の工事に從事したりしも、而も其佛蘭西に於ては、不幸にして之に期待し得られたらん勢力を有せざりき。彼はマッスの河を瞰制する丘上、アンボワズ城の下方なるクルソの小城に於て永き眠をとりぬ。此最大有名なる人物は、今や其墳墓だも有せず。彼は當時アンボワズ城の丘上なる禮拜堂内に葬られたりし也。此禮拜堂は彼の改革によりてにあらずして、却つて假政府のロジエールジユロにより、其含有しつる諸物を擧つて破壞せらる。千八百六十九年、政府は其破壞されたりし建築物の地下に見出されたる遺骸を拾集せしめ、之をばサントユーベールの小拜禮堂中に移さしむ。暗黑なる遺骸に混じつゝ

レオナルドの弟子

今猶偉大なるフローレンス人の些の最後の遺物を存するは其地なりとす。佛蘭西たるもの、須らく斯の如き紀念に相當する一遺碑を此場所に建立して以て、其名譽を表章すべきにはあらざるか。

レオナルドには數多の弟子屬せり。吾人は茲に其直接の弟子たりしものと及び彼の敎を受けずして而も其派に屬せしものとの區別をなさゞるべし。ベルトラッフイオ(千四百六十七年—千五百十六年)は、其餘暇を繪畫に寄用する底の紳士にてありき。此事實こそは、既に美術の實用に關したりし著しさを示すものなれ。吾人はルーヴルに於て其稀有なる眞正の畫幀を保有す。アンドレアソラリ或はソラリオ(千四百五十八年—千五百三十年)は彫刻家クリストフオロソラリと兄弟にして、ショーモンダンボワズにより佛蘭西に招かれ、千七百九十三年に破壞に歸せるガイヨン城の禮拜堂をば、其壁畫もて蔽ひたりき。彼は基督磔刑の高地と其名聲の積々たる、聖母(ルーヴル)を吾人に殘せり。ベルナルデイノルイニ(千四百七十年—千五百三十年)は、他の何人よりも能く其師の作品と混じ得るが如き點に於て、其師の手腕及び特に其精神を摸倣したり。ルーヴル

なる「ペコデイアット」は彼のジョコンドの未成のものに相當す。彼はまたルガーなるサンフランソア寺院の内部の正面全體を蔽へる「基督磔刑の高地」と、ルーヴルに移されたる壁畫「マージュ僧の崇拜」「世界の救主」等が示指する如く、其成功をもてキャラクターの大畫を開拓したりき。ゴーデンゾフエルラリ(千四百八十四年―千五百四十九年)は、ピエモン畫家中の鏘々たるもの(ヴエルセールなる「聖母の昇天」「ヴラルロの壁畫、及びルーヴルの「サンボール」等)。バッヂ(千四百七十九年―千五百五十四年)は、バルタザールペルッヂ(千四百八十年―千五百三十六年)と共に、其當時に至る迄有したりし形式と及び甚く異れる形式とを之に與へつゝ、以てシエンナの派を再興したり、何となれば「ロクサンとアレキサンドルとの結婚」「アルネジナなる」「サンセバスチアン」「フローレンスの官衙」及び「サントカテリンヌの氣絶」(シエンナのサンドミニック)に於ても、其彼を支配する處のものは、是れやがて表出のチャーミングと形體の美となれば也。されどフエルラニとバッヂとは、等しく又ラッフアエルの勢力をも受けたりしが、是れぞ恐らくフローレンスに於ての其居住より利せりしものなりしならめ。

レオナルドダヴインシ以後の美術

第二章　ミケルアンジエロとラッフアエルとの時代

レオナルド以後の美術は、既に成すべき進歩を有せざりしものゝ如く然りき。されど猶至高なる諧和に於ての、基督教義と古代主義、聖經とホメロスとを一層能く結合することに對する新努力を試みんこと存し。其美を毫も犧牲とすることなしに、より多くの道德的向上を得ること殘れり。ミケルアンジエロと、及び其之より八歲年少なる匹敵者ラッフアエルとが、其實現せんとしたりしもの即ち是れ也。或悲觀者流は此確然たるレネッサンスの勝利中に於て、宗教的美術の一衰退を目睹したりき。されどレオナルドが其クリスチヤニスムの用に希臘美を供したる時に於て、彼等は中世を經由し、以て純クリスチヤンの傳說に遡上したりし也。疑ひもなくクリスチヤニスムは、其世界的宗教たるの性質を以て、有らゆる文明に適應すべかりしもの、されどそはグレコローマン文明の最中に於て形成せられたるなりき。

サヴォナロール

ミケルアンジエロが、嶄然として頭角を斯道の諸群に挺んてんとしたりし時に於て、フローレンスはドミニック派の僧侶が引率しける宗教的共和の改革的計圖によりて深くも動搖されつゝありき。是れぞ正に「彼の大サヴォナロールが神德に感應したる其言辭を以て、伊太利を蔽ひたりし」時なりし也。此等の權化はマキアヴエリー其人にして、此「君論」の著者が斯の如きの感情を掌め得たりしとするも、吾人は其朴素なる精神の上に彼れ改革者の聲が之を奬勵しける忘想を想像せざる能はず。サヴォナロールは其驕奢に對して實現されたりしもの、其嚴格なる教義と相容れざりし處の美術作品をば燒夷せしめたり、されど彼は美術其物を拨拒すべく甚だ近からざりき。斯くて又長く課せられざりし(千四百九十三年—千四百九十八年)其ファナチスムにも係らず、彼が促したりし再び補修すべからざる破壞に拘らず、彼は美術家に高尚なる目的と、高遠なるインスピレーションとを與ふるに貢献せりしこと決して尠少ならざりし也。數多のものは之より不磨の印象を受け、彼のローレンゾデイクレディ(千四百五十九年—千五百三十七年)及びバルトロメオ(千四百七十五年—千五百七十一年)の如

シケルアンジエロ、スチンヌ、ツメクデイシスの墳墓、サンピエトロの圓頂

きは、其說教のまに〳〵有らゆる俗的の作品を燒棄し、一身をば偏に宗教的美術に捧ぐるを致しぬ。ミケルアンジエロに關しての彼は、其シックスチンヌに從事しける間に、サヴォナロールの說教をば不斷の讀誦となしたりき。

レオナルドダヴインシと等しく萬能的の天才たるミケルアンジエロは、其威權や彼の右に出で、且つ、人の云ひけん如く、人間の對比を超越せりしものに似たり。サブライムの言は、彼の作品に對して生ずる處の印象を約說し得べき唯一の言辭となす。

シケルアンジエロブオナロッチは、千四百七十五年三月六日、アレッゾの附近なるカプレーズ城に生まる。彼は其幼年時代より描寫的非凡の整置を示し、其高貴なる家族は、暴力を以てして迄も彼を之より轉ぜしめんと無益の勞を試みたりし後、遂にドンギルランダジョの工場に彼を入れたり。彼は亦熱心以てカルミンスの寺院にマッサシオの壁畫を研究せり。彼の「壯麗の君」と綽名されたるメデイシスのローレントは、彼の保護者と云はんよりも寧ろ其交友となり、彼をして其閑に乘じサンマルク廣場なる自己の庭園に集めたりし古代の彫刻物

を研究せしめ、又學者社會と文人社會とに於て其精神を完全ならしめき。ミケルアンジエロは、其保護者の死後(千四百九十二年)其時の一部分をサントエスプリの寺庵に送り、之に死屍を供給したりし觀長の恩惠によりて、專ら心を解剖學に注ぐことを得たり。千四百九十五年、「眠れるキユピドン」を作りたりしが、これは後に古物として羅馬に賣却せられぬ。千四百九十六年より千五百一年に至る迄を其第一次として羅馬に住し、而して千四百九十七年、其處にて佛蘭西王シヤルル第八世の使節ジヤンドラグロレイユより吾人がサンピエールに見る處の「ピエタ」の合作の注文を受く。此時既に有名なりしミケルアンジエロは、其フローレンスに歸りてより、現今のアカデミーなる大理石の巨像ダヴイッドの如く彼れレオナルドダヴインシの作品に對して會議堂の壁上に描寫さるべく、ピザ戰爭の一局部、即ちアルノ川に浴しつゝ敵騎の爲めに襲擊されたるフローレンス軍を表示したる彼の千五百六年に終成しける額の只一部分を製出せるに過ぎざる其殘部の一大多數の注文を委任せられつ。ミケルアンジエロの何等の作品も、又シックスチンヌのそれも、其同時代者に對して別に卓絶せる處は見

えざりき。此額は千五百十二年フローレンスの騷亂に於て破壞せられぬ。ジユール第二世とミケルアンジエロとの間に、吾人が各々全く奮怒し易き倨傲的の二性質を茲に期待し得たる如く、一度ならず困惑されたる關係の始まりたりしは、實に、千五百五年に於てしたるに未完のまゝ存する處の、其「俘囚」の巨大なる計劃の墳墓を以てしが、而も彼によりて成されたる作品は、只「モセス」のみなりき。次で法王は、ボローギユの市に充てられたる自己の巨像の如き新要求により企てられたる事業に止めずして彼を轉從せしめ、而てはシックスチンヌの穹窿を壁畫にて裝飾すべく彫刻の放拋を彼に餘義なからしめたり(千五百〇八年―千五百十八年)

○此等の壁畫は恐らく有らゆる時代、有らゆる國土に於ける繪畫の主なる作品たるべし。畏怖の感想の如きものを與ふるの點に於て、此天才は嘗て之より多くの深邃と壯嚴とを以て是認せられたりし也。此等の溫和なる顏は、其「婦女の創出者イブ」の「如く、一のサブライム的性質を採取せり。ミケルアンジエロは、舊約全書中の主なる光景を其天井に、及び「豫言者」と「筮女」と

を穹窿の基本部に表出したり。

彼等の間に起りたる烈しき爭論に拘らず、兎角につけ法王は、ミケルアンジエロに對し其最も强熱の同情を禁じ輕めざりき。羅馬法王位の恩惠は、ミケルアンジエロに對して、ジユール第二世の後繼者、フローレンス人、メディシス人なるローレント壯麗君の子なるレオ十世の下に、愈が上るも强く增加すべかりし也。かくて千五百三十年に及び、同じくメディシス人なる法王クレメント第七世と、皇帝シャルルカンとの同盟によりて、其母國の自由の威脅されたるを見たりし時、ミケルアンジエロの偉大なる其精神の當惑は痛甚を極めたりき。彼は其少時以來メディアイ人としての義務を負へりしもの、而も他に於ては、是れ啻に政府の變更たるのみならず、彼等は實に敗俗されたるメディシス人を其フローレンスにも課すべく欲したる暴政をば夢想にだも及ばざりし也。茲に於てかミケルアンジエロは、決然として自由とフローレンスとの爲めに立てり。彼は防禦指揮の技師として委任せられ、其背信者を表示したる爲め却つて身陷れられて逃れざるべからずなり。嚮て後千辛萬苦の危險を犯しつゝ攻圍軍の戰線を越え、再び其市に歸りたりしも、憐れや彼は其生國の爲めに只二日間盡すことを得たりしのみ。彼は征服者の復讐より遁れ得たりしかども、其心肝には永久に拭ふ

第三十二圖

ミケルアンジエロ作—思考者

べからざりし程の沈痛極まる悲慘の印象を受けぬ。而も彼は猶有らゆる希望を放拋せざりき。千五百四十四年ケルソールスの後、若し其援助によりてフローレンスの自由を恢復し得たらんには、彼の爲めに其政府の廣場

に騎馬の像を建設すべき旨をフランソワ第一世に申出でつ。彼がまた生涯に於ける第二の大悲痛は、パヴイアの征服者たるペスカラ侯の未亡人ヴイットリアコロンナの逝去(千五百四十七年)是れ也。ミケルアンジエロは同夫人に對して熱誠なる友愛を抱持しつゝありたりしもの、名家の出にして、而も亦其美貌と才智、其教育と德操とによりて著名なる此婦人は、時人より神とし、綽名され、伊太利の詩壇に其名を貽したりき。彼女はシックスチンヌの作者の紀念に於て後世子孫に於ける唯一の紀念を見るにふさはしかりし也。ミケルアンジエロの詩篇が、其國文學界に一高位を確賦さるゝに至れる少からざる理由はヴイットリアコロンナに依つて顯示せられ、若くは其インスピレーション、を彼女によりて附與せられき。さなきだに常に寂寞を愛せりしミケルアンジエロは、漸次世と相遠ざかるに至り、其絶えず委任せられし大作に於て、彼は纔かに自己の悲痛に對する慰籍を見出しつゝありしなりき。

ポール第三世は、千五百三十四年に於て、シックスチンヌの大壁上に、最後の判決を描出すべく彼に求めぬ。此繪畫は千五百四十一年のクリスマスの日を以て世に出さる。ダンテ的精神より全く漸侵されたる此作品、其之に對して世人の賞讃を傾注しける此作品は、吾人に於て穹窿の繪畫よりも劣れるものゝ如く見え、其インスピレーションを如として、吾人は茲に「筆法」の一端緒を感ず。此種の限定は、其一層強き理由に於て、彼れミケルアンジエロが七十五歳の時に描出したる(千五百五十年)「チャッペルホーリン」の繪畫に對して成さるべきもの。要するに金剛石を磨するには金剛石を以てせざるべからざると均しく、吾人が或作品に對して、感ずる處の賞讃を摸倣し得るは、是れ只シケルアンジエロをシケルアンジエロに比較してのことのみ。

之より數年前、即ち千五百四十六年に於て、神そのものよりインスピレーションを附與せられたる同一の法王ポール第三世は、サンガルロの死後、其弟子と助力者との暴烈なる反對ありたるに拘らず、サンピエール寺院の工事建築者としてミケルアンジエロに任命せり。而してヴアザリの如きは

「是れ眞箇不整頓の家」と云へり。ミケルアンジエロは先づ一方に於て其各部の職の滿足されんことを勉めつゝ、以て其不秩序と詐謀とを防止すべく着手したり。彼は死に至るまで此工事を保持し(千五百六十四年)其後繼者の連合によりて亂離し去られたりし此作物を終成し能はざりし也。されど彼が永眠するの當時に於て殆ど竣功を告げたりし圓頂閣が、其設計のまゝに終へられて公衆に示されたる時には、何人と雖も此美術家の自信する約束「予は空中にアグリッパのパンテノンを興すべし」との實現を非議し得るものはあらざりき。ミケルアンジエロは亦フローレンスなる、彼のメデインス人ローレント第三世とジユリアン第二世とのモーゾール式墳墓を刻したるサンローレントの新僧房と並にカピトールの官衙とを建設せり。ペンセロゾの名の下に知られたるローレント第二世の肖像と、及び意よりも寧ろ力を示す處のミユリアンの「晝」「夜」「黎明」「黄昏」の、其半ば隱れたる比喩的肖像とは、ミケルアンジエロが常に「深遠なる一の壯大を大理石に賦與す」べかりしことを示す。彼は其詩の一に於て自ら誦すらく、「最大の美術家たりとも、大理石の中に包藏すなる何物をも理會するの道を知らぬなるべし、意に從ふの手のみぞ、之を夫れより噴出せしめ得んなれ」と。

ミケルアンジエロの勢力

ミケルアンジエロの勢力は巨大なるものにして、確かにヴエニス畫家の上に及びラッファエルと其派全躰の上に迄感ぜられ、ヒームスケルクとハルレムのコルヂリスを以て、其和蘭に於ても美術界を支配し、ロッサはまた之を佛蘭西に於て播布すべかりき。されどそは常に幸福たるべかりし也。彼は自ら慨みを抱いて曰く、「我が智識は無能の大家を生むべし」と。乃ち世人が徒らに其力と誇張と、空虛なる傲辭と表出とを混じつゝ、ミケルアンジエロに對して爲したりしことを想像するは甚だ容易に過ぐ。

バルトロメオ、アンドレアデルサルト、セバスチアノ、ピオムボ

されどフローレンスはミケルアンジエロの生時よりして、諸多の大美術家を有す。リッシアレルリ(千五百九年—千五百六十六年)は、ミケルアンジエロの弟子たる以前に、ペルジンの門弟なりし人にして、サントトリニティイジユモン寺院の「十字架よりの降下」を描きぬ、これ恐らくブオルナロッチ派より出だせる最著の作品たるべし。フラルシアノ(セバスチノデルピオムボ)(千四百八十五年—千

五百四十七年)は、ヴェニス産にして、ミケルアンジエロの弟子となり其意見を以て彼を助け、又其描出に於ても彼を佐けたりし、以前に於て、ベルリニの教育を受けたるの人、而してラッフアエルの「トランスフイギユレーション」に對成さるべかりしナルボンのカテドラールを、永く飾りたる後、今や倫敦にある「ラザルの復活」と羅馬なるサンピエールインモントリオの「鞭撻」とを以てラッフアエルに對抗せんことを勉めるにきと世に稱さる。ドメニコの子なるリドルフオギルランダジョ(千五百五十年頃)は、ラッフアエルの交友たりし人。アリオットオアルベルチナリ(千四百七年—千五百十二年)は、フラバルトロメオの交友にして又其助力者なりき。フラバルトロメオ(千四百六十九年—千五百十七年)は、假令サヴオナロールに左袒して俗的繪畫を斷念したりきとするも、其サンマルク寺に於て將たフローレンスと巴里となる「グローリアス聖母」に於て、又は伊太利の最有名にして且つ最も適切なる畫額の一とし數へらるゝ、其ピッチ殿なる「十字架より降下」に於て、正に描寫、着色、組合せの有らゆる自由を保ちたりし也。

ヴインシとミケルアンジエロとの外に、彼れバルトロメオは、只其匹敵者として、其ヴインシと共にフローレンス派の最大彩色家にして、時人が「無缺圓滿の畫伯」と稱せりしアンドレアデラギヨロ(アンドレアデルサルトオ)(千四百八十八年—千五百三十年)を有したりしのみ。其顯著なることに於て、彩色家としての彼の材能は、特にサンマルク寺庵の壁畫「マドンナデルサッコ」「寺院に於けるプレザレテーション」等に現はれつゝあり。彼は此作に於て、彼のホントルモと云はれたるジヤコホカルツシ(千四百九十三年—千五百五十八年)及び、恐らくはサロンカレーの賞讃すべき「黑衣の青年」の作者たるフランシアビジオ(千四百八十二年—千五百二十五年)によりて援助せられたりしやに想はる。若年にして隔世したりきと雖も、アンドレアデルサルトオは多數の名作を產出したり。マドリッドなる「アブラハムの殉難」と、己が妻ルクレヂアデルフエデの寫眞畫、フローレンスなる「墳墓に於けるミーズ」「聖家庭」「アノンシエーション」及び「マンヌンチアタ寺觀の壁畫」並にルーヴルなる「慈善と聖家庭」とは、彼を驅つてレオナルドダヴインシの鋭利なる表出に齊らしむ。彼は其深遠なる點に於てこそレオナルドに劣りつらめ、より切實なる情緒の或物を有せり。アンドレアデルサルトオはフランソ

羅馬、ラッファエル、議院、聖母の像、フアルネーズ家、寫眞畫

ワ第一世によりて佛蘭西に招聘され、行きて伊太利に於ける美術作品を購求すべく、一の巨大なる金額を此王より受けたり。彼は其歸來することを嚴かに督ひたる後出發しけるが、其妻彼を誘致して王より委托されたる金を二人の用途に費消せしめつ。痛恨は餘りに薄志弱行なりし此美術家の生涯を早了せしめぬ。故にミケルアンジェロが當時ヴェニス人を除かば、彼は其時代の有らゆる大美術の後にまで生存したりしや必せりとのことを云ひたりしもの至當の言也と云はざるべからず。實にや一大光彩を放ちたりしローマン派そのものも、先づは既に存在せざるなりき。

羅馬は殊に法王職と其法王によりて企圖されたる種々の著しき事業との爲めに美術に對する一大中心たりし也。されど其處にはそれ自身發達するの中心存せず、美術の其處に於けるや、概して外來のものなりき。略言すればローマ派は、オムブリアン派とフローレンス派との氣力に養成せられたる一の光輝ある分枝たるに過ぎず。此派は殆どラッファエルと其集團とに限られつゝありたり。蓋しオムブリアの產なるラッファエルは、其生國に於て教育を始めたりし後、フローレンスの大家との觸接に於て其才を發達せしめたるなりき。

○ラッファエルは、千四百八十三年三月二十八日の聖日木曜日を以て、當時猶羅馬法王より獨立しつゝありたる一の公爵領の主都ウルビンに生れぬ。オムブリア派に於ての最も秀拔なりし畫家の一人たる其父は、ギオヴアンニサンチ(サンチオにあらず)と稱しき。彼は千四百九十四年、年齒纔かに十二歲の時父を失ひたりしが、かくてペルジンの門に入りて千四百九十九年よりペルーズのフランシスケン派寺院の爲めに、現今ヴアチカンにある其「復活」を描出したり。吾人は彼が千五百四年に於てミランの博物館なる「聖母の結婚」を描きたりしシッタカステルロに彼を見るべし。ルツビンの短なる居住の間、彼は現今ルーヴルにある小品の「サンミケル」と、同じき「サンジョルジュ」とを描きぬ。此時よりして彼はフローレンスに營住しつゝ、稀に不在なりしの外、千五百八年迄此地に在居したり。此居住は確然たる者なりし。マッサシオとレオナルドダヴインシとの繪畫、ミケルアンジェロの手になれる「ピサ戰爭」の畫額の研究、並にフラバルトロメオの忠言は、彼に一の

優秀なる技を喚起し、其力量の認識を與へぬ。世にラッフアエル第二の畫風と稱せるものゝ出づべかりしは此教育に因す。彼は當時まてベルジンを摸倣したりしもの。其作は猶シンメトリックにして多少の生硬存せり。吾人は既に疑ひもなく、其形式の美に於て、相貌と裝飾との溫雅に於て、神と稱されつる彼が天才の印象を其處に見たり。されど彼はフローレンスに到着後、其線の純潔に、着色に於ける處の、より廣く、より溫雅に富める筆勢、組合せに於ける處の、より多くの自由と及び多樣と、即ち之を一言して云へば、より多くの力と生氣とを添加せんことを究盡したるなりき。フローレンスなる「金鶯の聖母」、ボルゲーズ歩廊の「墓上の基督」、ルーヴルなる「美なる園丁女」は、這般進歩の區劃たり。軈て他の出來事は彼の天才に對し新奇にして且つ多大主要なる一變改革を準備するに至らしめぬ。

千五百八年、彼は其叔父ブラマントによりて羅馬に招かる。ブラマントはサンピエールとヴアチカンとの建築者にして、法王ジュール第二世に侍しつゝ一大恩遇を享け居たるの人。法王二世は件の青年畫家に任ずるにヴアチカンの議政場を裝飾することを以てし、既に其處に存在したりし壁畫を破壞し去らしめたりし程、ラッフアエルの才能を熱愛したりき。其之を覆ふべく與へられたりし此大なる表面に對せるラッフアエルは、何等の勞だもなく自然に其才能の豐富なることを自信を以て見出したり。彼は宗教的畫題を以て始めぬ。先づ彼が第二と第三との畫風の中間なる過渡期を劃するなる「聖餐の討議」即ち神學史の概要、次て最初には幾分かの憂懼をもちたりしも、法王の明示したる命令に對して大面積の俗的畫題を溢らしつゝ「雅典の學校」即ち哲學を描けり。其同一台上なる作の中央に於て、壯大なる紀念物の最中に配置されたるプラトーとアリストーテレスとは、劈頭に於て人の注目を牽きたり。彼等の周圍には、古代の大哲學者、ユウクリデス、ソクラテス、ピノフホン、エピキユーラス、ディオゼネス、ピタゴラス、ゾアストレス等を、其弟子達と共に種々なる集團に形成す。女性の像と溫和なる表出とを缺ける此嚴格なる作品に於て、ラッフアエルは彼のサンシツクスなる「聖母」の畫家と同一視せられ、其才能は決して之より高く價せらるべくもあらざりし也。斯般成効の後に於けるラッフアエルは、有らゆる種類の劃題

を縦縦無盡に描出することを憚らざるに至りたりしと共と、其多數なる比喩的畫像は暫く措いて之を云はずとするも吾人は「アポロンとミューズとを安置せるフォシッド山」「ボルセナの彌撒」「寺院より追はれたるヘリオドレス」「アッチラを留むるサンレオン」「放たれたるサンピエール」「ブールグの災禍」及び「マクサンスに對するコンスタンチヌスの勝利」等の

第三十三圖

レデスンの聖母

議政場なる壁上に續出するを見る。

○羅馬に於けるミケルアンジエロの現在は、彼をして更に熱心を活躍せしめたり。要するに交互に批評したりし此二大天才者が、何等抗爭の情を有さゞりし時にだも、其擁圍者等は、彼等の間に抗爭を惹起し、之を支持したりしなるべし。彼等はミケルアンジエロの卓絶したる畫題までもラッフアエルが之を採らんことをすら欲したりき。オーギュスチンチジは、吾人がサンタマリアデラパースに見る所の「笠女」の壁畫を彼に注文せり(千五百十四年)是れラッフアエルが壯大の性質を有せずとなし、又之をミケルアンジエロに借るべかりしことを云ふにはあらじ。彼は小面積の作なる、其「エゼチエルの幻想」「混沌を排せる神」に於て、十分自然なる處の壯嚴を與ふることを知れり。されど大フローレンス人の勢力が、其材能の上に感ぜしめられざらんことは疑ふべくもなく、時人また之を疑はざりし也。

ラッフアエルは其多數なる弟子に助力せしめ、又屢々下畫を作ることを以て足れりとし、時にはまた單に組合せの輪劃のみを作りて足れりとした

りしと雖も、彼によりて實作され、若くは其晩年、彼の指揮の下に作出された る繪畫(彼が千五百十四年以降、羅馬なるサンピエールの主任建築者たる任務、及び古代紀念物の會計總裁と發掘研究の指揮者とを兼任せる事業)の數と其主要なることゝは、精神と手腕との活躍こそ證すれ、其作の如何なるものと雖も、疲勞又は性急などに襲れたるはあらざる也。彼が竣工を追いたりし議政場の傍に於て、亦も其壁が内廊下の弧狀小穹窿を支持するアルカード付の歩廊をなせる觀棚に從事したり。此等の小穹窿は、世に「ラッファエルの聖書」と稱する繪畫を以て蔽はれ、其の壁上にはアラベスク、奇怪の肖像、花卉及び果實等の畫、描列す、是れ恐らくはレネッサンスの最も純なる裝飾なるべし。彼は猶進んで其甚だ種々なる畫題の用に設きたりしと同樣なる非常の自在を以て、「プシケーの物語」を表出するファルネジンに從事せり。彼は終に其一のみにても、以て一博物館の名譽とするに足るべき畫幀を組成すべく續けぬ、即ちピッチ宮なる「説教に於ける聖母」(千五百十六年)「サンシックスの聖母」(ドレスデン)ボローギュの「サントセシール」巴里な

第三十四圖

ラッファエル作—雅典の學校

る「聖家庭」(千五百十八年)マドリッドなる「聖母とスバシモ」(千五百十六年)等是れ也。ラッファエルはまた一大寫眞畫家なりき、是れ「バイオリン彈奏者」(昔てシアルラの歩廊にありたる)「バルタザールカスチグリオーン」(ルーヴル)ピッチ宮なる「ドンナヴエラタ」「ジュール第二世とレオ第十世」及び「ツアルトリスキー(クラコヴイアなる)歩廊の「ウルビン公」を見なば足りなむ。彼はレオ第十世が彼を僧正に任命せんと思考しつゝありたるの時、千五百二十年四月六日を以て溘焉瞑目するを致しぬ。

ラッファエルの運命は美術史中唯一のものたり。彼は數年にして運命の恩

惠を汲み盡しぬ。彼は後世に於ける如何なる美術家も比肩し得ざりし人望、而もまた英獨の反ラッファエル派によりて成されたる、現代の或二三の試嘗ありたるに係らず、嚴として動搖されざるの人望を存したりき。此人望なるや、彼が他の大家中に個々とし輝ける種々の性質を其一身に集注したりしが爲めに得られたるものならずと雖も、而もヴイロ氏の云へるが如く、『彼は常に勞せずして高められ、潤飾なくして而も愛あり、過度なるなくして而も熱心に、かくて其最も單純にして最も宏大なる作が、等しく生氣と壯大と及び美とに滿ちたる自然的創造の印象を保てるを以て、得られたりし也。』されどラッファエルに對して充分なる正當を保留せんと欲せば、其シックスチンを看見し來れるの時ヴアチカンの議政場を訪問せざらんを要す。スタイル夫人云はずや『ミケルアンジエロは聖書の畫家にして、ラッファエルは福音書の畫伯也』と。此の二人は各美術の一方面を擬人したり、而して吾人は、彼のモザルトをベトーヴエンに、ホメロスをヴイルジールに對すると等しく、此兩畫家の精神と生涯とに於けると同時に、又其作品に於ても常に之を相對せしめずんばあらじ。ミケルアンジエロは陰欝孤

ラッファエルの派、ジユリー、ロメン、千五百二十七年に於けるローマの劫掠、

獨の生活をなしたりしと雖も、ラッファエルは其善良にして果敢なる五十弟子に擁せられつゝ人生を歩道したりき。獨り人間のみならず、理性の缺乏せる動物をも愛したりし此人は、其到處の周圍に、晴朗なる調和と歡樂とを支配せしめたりし也。此個人的快樂は其弟子の上に影響を及ぼしつゝ之が結果として、美術の上にもまた一の幸福なる感化を蒙らしめぬ。

何れの畫家も彼より光輝ある派を形成したることなく、又何れの美術家も其工場に生活せりしこと彼より長きものはあらず、されど其弟子中に只一人、ジユールローメンと號されたる、ギウリオピッピの羅馬にありしこと世の記憶に存す。ジユールローメン（千四百九十九年―千五百四十六年）の側に、世人は特に、カラヴアジオのピリドールカルダラ（千四百八十七年―千五百六十五年）フローレンス人なるペリノデルヴアガ（千五百年―千五百四十七年）フランセスコペンニ（千五百五十九年）ドッソドッシ（千四百七十五年―千五百四十六年）並にオムブリア人なるチモテオデラヴイッタを特記する也。此等の有名なる美術家は彼等

自身の爲めには働かずして、如何に其師に對し多くの尊重と忠實とを抱持したりしかを、師の死後に刻せらるゝことを以て滿足したりしのみ。猶又同派に屬するものとしては、光澤微細畫家ジュリオクロヴイオ、彫刻家マルクアントニオライモンデイ及びフランダー人なるベルナルドヴアンオルレイの如き外國人をも擧揚せずんばあらず。其一大恐怖すべき出來事は、ラッフアエルの死後數年ならずして彼が形成したりし美術の群を散亂せしむるに至りぬ、吾人はブールボンの元帥の軍隊によりて爲されたる羅馬の刼掠を說話せんことを欲する也(千五百二十七年)。要するに既に彼等の中に於ても最も著しきものなるジユールローメンは千五百二十四年よりゴンザックなるフレデリックによりてマンツウに聘せられ、其處にて最大惠福を享受しつゝありき。彼はチイ宮殿の建築に於ての熟達せる建築家にして又技師たり、彼はまた主として「シユピターがチタンを電擊せる圖を以て其天井と壁とを蔽ひたりし「巨人」の廣堂に大裝飾者として其才能を發揚せり此作品たる正しく有名にはあれど、恐らく同宮にある「プシケーの物語」及びコルトリールの繪畫の多くに價せざらん也。

ヴエニス派、第二期、ジヨオルジオン、チチアン及び其同時代者

吾人が今正に想起すべき災害によりて、羅馬が爾かく困亂されたりしときに際してのヴエニスは、此の市に對して形成されぬる同盟の勝利者として、其隆昌の進行を取れりき。ジヨオルジオンとチチアンとはレオナルドの敎誨にベルリニのそれを結合しつゝ該派の壯觀を其最高潮に捧げたり。ジヨオルジオン(ジオルジオバルバレリ)と、チチアン(チジアノヴエセルリオ)とは、同年にして此世に生れぬ(千四百七十七年)されど其前者は千五百十一年に於て夭折したりしにも拘らず、チチアンは百歲に至る迄生存し、ジヨオルジオンはまた、其時人よりも夙く材幹の全力を發揮するの境に達し、啻に老師ベルリニによりて摸倣されたりしのみならず、チチアン其人にも摸擬さるゝの名譽を有したりき。彼が生國なるカステルフランコ寺院の祭壇後部の裝飾畫、ルーヴルなる「田園の合唱」、維也納の「三聖僧」、ピッチ宮の「合唱」等の如きは、正しく其名譽を判定するもの。されどチチアンは其長き生涯に於て、嘗て自己を凌げるジヨオルジオン其人に擯んずべきの時間を有せずんばあらざりし也。甚くも世の注意する處となり、餘りに處々切れ〳〵にされたる其最初の畫風(ドレスデンのシーザーの最後)は、嘗て

増大を致すことに躊躇せざりき。千五百十八年、彼はヴェニスのアカデミーなるアッソンプションをものし、千五百三十年にはボローギュに於て、其時より漸次増大し行くのみなる、其子フィリップ二世の時迄續きたりし恩寵を彼に許與したるシャルルカン皇帝の寫眞を作りぬ。

ミケルアンジエロとセバスチノデルピオムボとのヴエニスの通過は、此派の上に關係を及ぼすべく缺くべからざるものなりし。フローレンス派の其壯大の感に打たれたるチチアンは、此壯大表出の下に、彼が第三期の畫風の始めとし示さるゝ處の、ヴロナなる「サンピエールの死」を製作したり。其傑作とし見做さるゝ此畫は火災に厄遇して今や消失に歸しぬ。何れもにせよ吾人は夫れと同一の聲價を、サンタマリアデラサリユードの繪畫「アブラハムとアイザック」「ダヴィットとゴライアス」及び恐らくは其最も完全なる作品たるべきルーヴルなる「墳墓の基督」に於て之を見出す。彼は其最後の日に至る迄斯業に從事せり。吾人は彼れチチアンが、既に九十五歳てふ高齢たりし時に於て、僅かに始め得たりし處の、彼の千五百七十一年十月七日に開始されたる戰爭「レパレトの戰」に於ける比喩畫幀「マドリッドの地に見て感慨なき能はざる也。彼は此畫に於て、其以前の諸作に於けるが如き堅實確的の筆意を示さゞりしと雖も、而も斯の如きの畫幀は其一名聲を此美術家に賦與するに足れり。彼が其百歳の老齢に於て疫に斃れたる時、猶且つ「十字架よりの降下」に從事しつゝありたるのみか、茲に始めて繪畫の繪畫たる所以のものを解するを得るに至れりしことを云へりき。斯くも長く、又斯くも充實したる生涯の其傑作とし見做さるゝものゝみを擧げんも、甚だ時間を要すべきが故に、吾人は既に示したる繪畫の外、其宗教的畫題中に「聖母の推擧」と「ペサロ家の聖母」、神話的畫題中にマドリッドなる「多産の神に對する供物」及びボルゲーズ歩廊の畫題「神聖なる愛」と「汚瀆なる愛」とを追想して足れりとせん。或は其フロラとベラ(フローレンス)に於て、マドリッド博物館なる「チチアンの女」に於て、ルーヴルなるサロンカレーの寫眞畫に於て、吾人に美と光明とを表し、或はオッタヴイオとアレキサンドロ及び法王ポール三世とを同一額中に集めては(テープルス)吾人に有らゆる其高僧の偉容を解せしめ、或は「フィリップ第二世」の冶淡にして酷烈なる相貌若くは熱甚に襲はれたりしに拘らず、甲

冑を裝ひ軍馬に跨りつゝムールベルグに戰ふ軍勢を率ゆる爲めに自己の苦痛を制しぬるシャルルカンの夫れを復活せしめたるに論なく、チチアンは正しく第一流の占位者たり。よしやチチアンは、固有に風景畫家と云はるべきものにあらずとするも、彼がジョオルヂオンと共に水平線を低下し、最も復種なる景に人物を配合して以て其風景畫の構成を終へたり人とし云ひ得ざらんや。

チチアンが其總ての上に嶄然として頭角を現はしたりし同時代者中、恐らくはチチアンとジョオルヂオンとの以前に於て、世人が多數ヴェニス派の畫中に見る處の婦女の高尚華美なる顏容を創始せる老パルマ(千四百八十年—千五百二十八年)マドリッドの博物館なる「婚約せる男女」とピッチ宮なる「三老人」との作者たるローレンゾロットオ(千四百八十年—千五百六十年)既に示せりし如くミケルアンジエロの弟子となりたりしも、而も決してベルリエの着色を忘れざりしセバスチアノデルピオムボ(ルーヴルの「紀念祭」)さてはチチアン其人と相對峙せんことを欲求したるボルデノーン(千四百八十四年—千五百四十年)及び最後にモントと云ひしボンヴイシノ(千四百九十八年—千五百五十五年)とプレッシア

ヴェニス派、第三期、ヴェロチーズ、チントレット、ボルドーン、

市の名譽たるローマニノ(千四百八十五年—千五百六十六年)とを擧揚せざるべからず。

第三十五圖

チチアンーヴエロナなるサンピエトルの殉難

チチアンの死後數月にして、恐ろしき災禍はジユカルバレースの一部分を呑

燼し(千五百七十七年)其起原以來此派の最も有名なる畫家等の從事しける有らゆる繪畫を破滅し盡したり。されどヴェニスは幸にして猶此等の損失を償ひ、更に其大會議堂に其歴史の最光榮ある時期、フレデリックバルバルッスとの關係、第四十字軍との時期を追想せしむるに足るべき畫家を有しき。繪畫が全伊太利に於て衰頽に傾けりし間に、ヴェニス派のみは其隆盛を維持したり、是れ第一に先づヴェニスは、其全半島に擴充せる政治的、社會的の降沈に干與したりしことの他の諸國より極めて少かりしが爲めにして、加ふるにヴェニス美術家が、全然快樂と驕奢とに從へらるゝ如く見えつゝ、猶常に精確なる描寫、自然の誠實なる研究的憂慮を保留したりしを以て也。吾人は彼の「解剖學の要約」の像と云はんより寧ろジャンカルカールの肖像とも稱すべきものを(ヴェサール)チチアンの作に歸して些の疑點だも挾まざるもの。ボールヴェロチーズ(カリアリ)は其少時最も周到細微なる注意を以て、レイドのルカとアルベルトジューレルの彫刻とを研究し復製せり。かくして準備を終へたる其後に於ける彼は、有らゆる奇想に抗身し得たるなりき。

第三十六圖

ヴエロネーズ—ヴエニスの光榮(ヴユカルバレース)

ボールカリアニ(千五百二十八年—千五百八十八年)のヴェニスに於けるや、ヴエセルリオ程の大家と見えつゝ、チチアンのそれの如く金色ならざりしかども、

其有力なる銀色の調和を以て、ヴエセルリオよりも多くのチヤーミングを有せるものゝ如く然りき。光彩、調和及び配置に關してはジユカルパレースなる「ヴエニスの光榮」の右に出る裝飾畫あらじ。而してヴエロネーズの作に拘る幾多の繪畫、其畫家の墓所たるサンセバスチアン寺院の額、ジユカルパレースなる「歐羅巴の向上」、ルーヴルなるミケルアンジ・エロの値價ある縮寫たる「チタンの墜落」(舊ジユカルパレースの天井)と、及び彼が其時代の主なる大人物の寫眞を集めたる「カナの婚儀」倫敦なる「ダリウスの家族」、ルアンの「サンベルナベ」カーンなる「サントアントニオの發心」ヴエロナなる聖者の首部の高尚なる表出が、其サプライムの盛に觸るゝなる「サンジヨルジユの殉難」とは、此天井に比肩すべきものたり。實に美なるヴエニス的服裝をなせる聖書的の人物を以て飾り、其作中に最も意外なる附屬物を配せる裝飾的功果に向つて、總べてを犧牲にしけるものゝ如かりし此畫家は、等しくまたルーヴルなる「サンジヨルジユ」、「基督磔刑の高地」及び「エムマウスの巡禮」の基督の顏を以て之を示せる如く、表情的にして且つ崇高なることを知れりき。ヴエロネーズの才能は、其富裕なるヴエニス人が大陸に建設せしめたりし別墅、例へばチエナなる、ヴイセンスのロトンドなる、就中ギカコムベリなる別莊の裝飾中に、奇構と特殊の自在とを以て顯はる、イリアルト氏が『此最後のものを見ざれば、以て十分にヴエロネーズを知るものにあらず』と云ひたりしもの、特に然る處たり。

最も有名なる彼の同時代者、猛烈なれども窘束不等なる美術家にして、其自ら云へりし如く、ミケルアンジエロの描寫に、チチアンの色彩を結合すべく勉めたる、チントンツト(ジヤコポロブスチ)(千五百十二年―千五百九十四年)は、「サンマルクの神詫」(ヴエニス博物館)慘憺たる「土耳其人と基督敎徒との混戰」(マドリツド)及びジユカルパレースなる「ヴエニスの威權と樂園との比喩畫」の如き、其最も優長なる作に於ても、到底ヴエロネースの劣者たるを免るべからず。

此二大家の側に於て、吾人は恐らくチチマンと共にヴエニス寫眞畫家の嚆矢にして、其「ヴエニスの鐵鎖」が此派の最有名なるものゝ一なるパリスボルドーン(千五百年―千五百七十年)ボニフアチオ(千五百年―千五百七十年)ダルマシヤなるセベニコの產にして、其才能ありたるに拘らず、轗軻不遇に生死したるアンド

レアシアボーン(千五百二十二年—千五百八十二年)其生涯の大部分を羅馬に送りたるムチアー(千五百二十八年—千五百九十二年)(ラザールの復活)寫眞畫家モロニ(千五百二十年—千五百七十二年)バッサノの產なるジャコボダポント、即ちジャックバッサン(千五百十年—千五百九十二年)を見る、而して此ジャックバッサンは、初めチチアンを摸倣したる後、一層混和の缺如せる畫風を取り、其一般畫中に自然大よりも小なる人像を產出し夜の光景、人工光線の强烈なる功果を追求しつゝ、終に動もすれば其彼が動物を配することを愛したりし田園的畫題をものするに至りぬ。

パルマ派、コルレッオ、パルマの尊隆

爾かく大にして種々なる着色畫家の聲價にも關せず、吾人はヴェニス以外伊太利の其種類に於て、無比の最大着色家アントニオアレグリダコルレジオ其人を見出すべし。

○コルレジオ(千四百九十四年—千五百三十四年)は、陰影畫の大家にして、此點に於ての彼は、實にレムブランット以外に一人の匹敵を有せず。彼以前の美術家等が、其明を以て陰に對せんと試みたりし間に、彼が第一に其作品によりての最も有力にして最も幸福なる功果は、其コントラストと、同じく又アナロジーより來るべかりしこと、及びメナル氏の云ひけん如く、其畫抹畫法の魔術は大魂によりて重ねられ、漸次に遞增する影と影、光線と光線との並列を生ず。されどコルレジオの陰影たる、光輝ありて透明、其何人と雖も彼より能く、圍繞するなる大空と光線中とに其畫額の人物を融化するの知能なかりき。彼はまた兼ねて縮畫の一大家たり、而して又其顏を隆起狀に描出するを了知せる最初者とし稱さる。終に彼が創出せりし婦女及び殊に兒童の典型は、其深き溫和なる微笑に於ての技を齊うしたりしものにオナルド只一人のみ。彼の天才は其豐富の度に於て、恐らくは繪畫界數多なる大家の夫れよりも劣れりしならんと雖も、而も其等の裡に包含さるゝの價に値せり、何となれば其想像力の包有さるゝ圈內に於て、正しく彼は唯一者たれば也、加之らずアンニバルカルラッシュは、其目を以て畫家中の最も新機軸を出したるものとなせりき。吾人は彼が決然としてパルマ若くは其附近を去らざりしものゝ如かりしを見て、愈々其才の偉大なるに驚服

せざる能はず。吾人は彼の師の何人なりしかを知らざる也、彼れ一日ラッファエルの畫額に接見するや、深き沈默に於て之を觀察思考したりしが、驀て、予も亦是れ畫家たり」と絶叫しけるとなん世に傳ふ。

吾人は「ルーヴル」に於て、「サントカテリンの秘密結婚」、「アンチオープの睡眠」及び「惡德と美德」との比喩を表出する處の、其水顔料にて描かれたる二の組合せるによりて、正確なるコルレジオの一觀念を爲し得られん也。此等の作は、バルマの「サンゼロームの聖母」又は「夜」の名の下る知られ、有らゆる組合せが基督てふ嬰兒を圍繞すなる光線によりて照らされたる、ドレステンの「牧童の崇拜」と其聲價を等同にす。されど其最も顯著なるものは壁畫即ち是れ也。バルマなるサンジャン寺院のそれは、恐らく此種の最も美はしきものたるべし。吾人は彼がミケルアンジエロの「最後の審判」と摸倣したるだけ、それだけ多く、其天の女王を擁圍支持する天使の飛散に聰智を示せるものなることを斷言し得。かくて此「最後の審判」が公衆の展覽に供されたりしより五年にして、コルレジオは黄泉に逝焉したるなりき。

彫板、マルクアントニオライモンディ、アンチオープ、ラファエル、ギイヤ、マイアンモンテンテ

コルレジオの名聲は、其勢力と均しく、四十歳を一期としての其夭折の後驀て四方に傳播すべく些の躊躇だもあらざりし也。バルマの派はマッツオラ(千五百七年—千五百四十年)よりシドーン(千五百八十年—千六百十五年)に至る迄、常に其記表を保守したりき。此名聲は次の世紀世紀を經るがまゝに益々增大し行くのみにして、其勢力や不意なりしにも係らず確實なるの有樣に於て、第十八世紀末葉に於ける佛蘭西繪畫の變遷中に感ぜられぬ。冷淡枯乾なるまでに硬直なる精神のダヴイッドが、其時代の美術を變形せんとの決心を取りたりしは、コルレジオの崇高なる溫雅に對して也。其プリユードンに關しての彼は、バルマの大家の流を汲みたるものゝ如し。

○彫刻の諸派は一般に繪畫の派に次て形成せられつ。故に當時に於ける此美術は、伊太利の地に其光彩を煥發することを缺く能はざりし也。クラシックとなりたる其彫板に、感想の高尚と、趣味と及び手際との純粹を示すなるボローギユのマルクアントニオライモンデイ(千四百七十五年—千五百四十七年)の派は、ラッファエルの派と同屬す。されど其彫板が猶成すべ

き進歩を有したりしは、注意せざるべからざるの事たり。マルクアントニオの嘗て製出したりしは、只其樣式模樣のみ。されど當時伊太利に於て、強

第三十七圖

コルレジオのサンセロニムの聖母(パルマ)

烈なる熱心を奮勵しつゝありたるアルベルドジューレルの彫刻を見て、其才幹を喚起しける時に當りての彼は、專ら金工のみに意を濺ぎたりき。彼は之を注意深く研究し、其模倣を稍や遠くに迄進め過ぎたり、何となれば、此獨逸大家の署名をも利用したる彼は、其復製品を原品の如くに賣りたりしを以て也。されどラッファエルの派に屬したりしを以て、彼は甚く異れる一形式を採りつゝ、其生涯の後半に於て、獨逸彫板家其人が、彼の樣式のまに〳〵其教育に群集するを見るの名譽を有せり。レナッサンス時代に於ける伊太利の最大彫板家は、ライモンデイと共に、其本來の彫刻が其畫と同一の賞讃を値したりし美術家アンドレアマンテーギュ其人となす。パルメザと稱せられたる畫家フランケスコマッツオラもまた、正しく其銅板彫刻によりて有名なりし也。

第三章　彫刻、建築、工藝、第十六世紀末葉の伊太利美術

彫刻、ミケルアンジエロの雨ノ中ニ於テ危ヤウキ生涯ヲ送リ、ロンバルド派、サンソヴイノ、ベルリツツオ、アントニオ、ケンニ、モデーナ

伊太利は當時彫刻の中心として就中フローレンスを有し、而して此中心はミケルアンジエロの勢力によりて支配せらる。此天才の其模倣が、特にクラシックなるべき美術に於て危險たらざらんが爲めには、餘りに個人的にして、其拔群の奇構に萬事を犧牲となすべく餘りに決然たりき。此危險は、アムアナチ(千五百十七年―千五百九十二年)(フローレンス人なる「大公宮の噴泉」及びミケルアンジエロの匹敵たりと稱しつゝ只管彼を扮擬するに過ぎたるバッシオバンデイナリ(千四百八十七年―千五百五十九年)(「ヘルキユラスとカクス」)との矯飾に於て遺憾なく現はれぬ。大家の正しき傳說は、却つて明瞭に、千五百九十七年に死したるギヨームデラポルタの手になりたりしサンピエールなる「ポール第三世の墳墓」に於て見出され、殊に最もジヤンボローギユの名の下に知られたる美術家の作品に於て然りとなす(千五百二十四年―千六百八十八年)。彼はボローギユの「グランドブラースの噴泉」フローレンスなる老宮殿の廣場なる「サビヌスの略取」と「コスム一世の騎馬像」就中最も屢々製出されたる肖像の一なるメルキユールによりて、其時代の有らゆる伊太利の彫刻家を凌駕したり、されど彼はも

と伊太利產の人にはあらざりき。サンソヴイノと云はれたるフローレンス人アンドレアコンツツシ(千四百四十年―千五百二十九年)は、是より以前の時期に屬す。フローレンスなる洗禮堂の中央門戸の上なる「基督の洗禮」及び其指揮の下にローレツトのサンタカザによりて製出されたる大作、特に「豫言者と筮女」との肖像は、ドナレルロとミケルアンジエロとの間にありて、彼を伊太利の最大彫刻家となしぬ。彼は其名と才能の一部分とを子弟なるジヤコポタツチ(千四百八十五年―千五百七十年)に讓れり。故にタツチはまたサンソヴイノと稱したり。タツチはヴエニスに働き、此處に彫刻者として、サンマルクの銅の門戸、及び階段に其名を附したる巨人の大理石像二個を彫刻せり。茲にまた、ロムバルドとモンテルホ(ローレツトに働きたる)アンドレアリツシオ(千四百八十年―千五百三十二年)バルヅウなるカテドラールの多枝なる蠟臺ツリオとアントニオロムバルド(バルヅウなる、サントアントニオの墳墓の凸彫刻)及び兩者共にモデーンの出にして、マツツオニとベガレリとの彫刻者なる、特に西班牙に於てフイリツプ二世の命を奉じつゝ、エス、キリアルに名を藏かせし、一はアンドレアマンタ

ーギャより、他はコルレジオより感化されたるものゝ如かりしレオニの家族二人を掲擧すべし。ミケルアンジェロと共に、其彫刻中に於て最も世に知られたるものはベンヴエヌトオクリニ(千五百年—千五百七十一年)其人たり。彼は此名聲の幾部を、其時代の美術家風俗に對して如何にも奇異なる生涯を送りたる記憶に歸せり。彼は熱心に、且つ全く冷靜なる內心を以て、其生涯の種々なる出來事を云へり、其內には彼の才能がインスピレーションを與へたる價値により、常に所罰を避くるの途を見出したりし處の、殺人及び虐殺をも含む。即ち其の羅馬を包圍しけるブールボンは勿論、プローレンスを攻圍せるレオランジュのフイリップをも、其の城塞の高處より殺害したりしは彼なりしことを吾人に示せり。彼が爾かく生氣ある方法に於て、變化に充てる鑄造をなせる銅の「北斗星宿」(フローレンス)其の最著作物の一たり。ルーヴル宮なる彼が「フォンテンヌブローのニムフ」は、要するに其の同時代の佛蘭西人ジャングウジョンの「ディアーン」の優秀を、更に一層顯著なりしめたるに過ぎず。想ふにケリニは殊に最も金工の第一流者とし有名なりしならん。不幸にも彼の作に關しては、維也納

金工、武器、

の金の鹽皿と、ウインソルの楯とより外に眞正の作物存せざる也。

○此楯は其如何なる點に於て武器の華奢が推し進められたりしかを示す。當時の武器製造者は金工と混同せり。此美術の最美典型を與へたりしは依然として伊太利なりき。ミランのチクロリと兩マッサグリア及び、恐らくは「劍の王」なるセザールボルジアの劍の作者たるベルキュールとは、アウグスブルクのヘルムシード家、トレードのサハグン家と其名を均くし、若くはこれを凌ぎたり。第十五世紀に於て、甲冑は既に一の幸運を價す。第十六世紀に於ては、材料の高貴よりも一層裝飾の多くを之に與へぬ。最大の美術家たるヴインシイ及びチチアン、就中ジユールローメンは、武器製造者の爲めに意匠を作製せり、而してまた吾人は、ケリニ其人も彼等の中に算入せられて、些の失墜だも釀すべく想到すべからざるを見る。銅鐵鑄造者の熟練は、戸の打戸環に於て顯れたりしが、其之に典型を與へたりしはサンソヴイノにてありき。

メダル彫工

○ケリニはまだメダル彫工として秀てぬ(フランソワ第一世とクレメント

第七世とのメダル)。古代典型の他の美術よりも一層能く受收されたるメダル彫刻は、自らレネッサンスの運動を利用すべかりし也。かくて堪能なるメダル彫工は充滿せり。ヒザネロ(千三百八十六年—千四百五十六年)は此派の創搬者にして、之に次てローラナ(千四百六十年頃)カラドッソ(千五百年頃)ドメニコヴエチチアノ(千五百四十八年頃)マッテオデルナザロ等來る而してローラナはレネ王廷に隷屬したる人にして、吾人は其ルイ十一世のメダルを知れり。

玻璃工、モザイック、

○第十五世紀の末葉より第十六世紀の間、其最高潮に達せるヴエニスの玻璃工は、等しく形狀不盡の奇搆と裝飾の富贍と、並に着色に於る技術の熟達と原料の組合せとによりて著しきものたり。繪畫を施し、着色を施し、彫刻を施したるヴエニスの鉢と盃とは、全歐羅巴及び東方に於ても熱望を以て購求せられき。此等の器物は、墺太利の太子マキシミリアンがルイ十一世との戰爭に際して、ブリユージュに借財を約したりければ、其擔保にとて金の裝入されたる黄色のヴエニスの鉢を與へたりし程の價に到達したりし也。

家具

モザイックも亦羅馬に於て(アロイゾデラバースによりての人民のサンタマリアなるナジの禮拜堂)及び猶ビアンチニッツカチを以て一層ヴエニスなるサンマルクの一大活氣を以て適用せられぬ。フローレンスにての此種の裝飾は、終にドメニコギルランダジョに光榮を全からしむ(サントマリアデフルールのモザイック)。其弟ダヴイットは就中モザイック畫家たり。故に最大畫家たるチチアンとラッフアエルとがモザイストとして畫額を作去せりしを見るは、毫も驚くを要せざる也。されど此時や、既にモザイックに對して、其繪畫と同一の結果を精密に要求するの誤謬に陷沒し始めつ。

○如上一般を擧示し來りし美術の有らゆる資力は、當時伊太利に於て其傑作(シエンナ、ヴエロナ、ベルガーム、及びフローレンス等)を産出したりし唐木匠の用に供置せらる。

フラギオヴアンニダヴエロナ、バッシオデルアギョオロの如く、茲に其才

能の最良なるものを寄與したりしものは算することを止めて、ベチデット、ダマイアノ、ドナテルロ、シギョレリ及び之と等しく眞面目なる美術も、此種の作品中最も種々なる技、細木匠、金彫、凹彫、モザイック、鍍金、象篏、彫刻、七寶―最も種々にして、最も貴重なる材料、象牙、螺鈿、珊瑚、眞珠、銅、銀、金、縞瑪瑙、トッパーズ、碧玉は結合され、眼目の快樂に對して美を競へるが如き其等の書齋に於て、此美術に加はることを嫌忌せざりし處の(クリユニイ、ルーヴルの博物館)其最美のものは、恐らくフエルリエール城のものなりしなるべし。

建築、ブラマンントの時期

レヂッサンスの最初の時代に於ての伊太利の建築は、ブルヂレスコによりて支配せられ、就中フローレンスに於て其光彩を放てりき。其次期はブラマントの名の下に知られたるドナトラッツアリによりて特徴され、而して其中心として法王の居都を有せり。

○古代の直接摸倣は、益々確立し、而して建築家が其建築の基礎に、式のシステムを取りたりしことならずして、彼等が其典型として、ヴイットリユーヴが之を精量し詳記したるが如き式、減少され、要部を缺き、形狀を崩されたる其等の式と、概ねフイディアスの式と甚しくも異れるローマドリック式とを取ることに齋らせりしことは、此美術に對して一の不幸にてありき。されど吾人は、シシリイ及び伊太利そのものに、賞讃すべき希臘式の紀念物を見る。ペスタムの寺院が建築家の注意を牽かざりしことを説明せんは困難事たり。クラッコ氏の觀察しける如く、吾人苦しブルヂレスコの時に於ての雅典が、千四百六十年に於て、漸くマホメット第二世に放たれりし處の、フローレンスの一家たるアッキエウオリ家に屬しぬることに想ひ到らば、雅典も將たバルテノンも、彼等の間に知られざるものたるべかりしならん。よしやヴイットリユウヴは大オーソリチイにして、當時流行の種々なる比喩的繪畫に於て、彼が一の約束を書したりし美術を擬人することに對し、之を選びたりしとするも彼の君權は暴君的ならざりき。ブラマントと其同時代者とは、古代の尊敬に一層近き傳説と及び彼等の時代の必要とを聯合することを知悉せり。彼等が其確的なる研究より、就中古代の最も微細なる遺物を牽引したりしは、是れ正に建築の種々なる部分を結合すべき對比の

性質なりとす。彼等は疑ひもなく窓口に於て方形を愛し、明かにコルニース若くはバンドーによりて層階を分てり。只純粹に裝飾等の一要素として圓柱を使用すること彼等に來りぬ、されど猶一層彼等は、此圓柱に動もすれば其自然に充用されたる直接支持の任務を許し、柱上に置かるゝアルカードに一大地位を與へたり。宗教的建築としては、彼等はローマンチック美術よりもビザンチウム美術によりて多く借りたるものゝ如かりき。彼等が選定せりきと思惟さるゝ典型は、其極端は奥堂によりて圓形にされ、四分の一圓形によりて包まれたる各分枝の等同なる希臘式の十字形也。此十字形部の上には、それ自身

第三十八圖

羅馬のサンピエール

太鼓形に支持さるゝ圓頂閣聳立し、其高められたる太鼓形は、建築物の内部を廣く照すことを許せり。ブラマントが、其基石の千五百六年四月十八日に据へられたりし巨大なる作、サンピエールに與へたりしは此設計なりき。トデのノートルダムドラコンソレーションは、最も能くブラマント派を特表する處の宗教的建築物たり。此寺院の式の純粹なると全躰の完全なるとに拘らず、其特にレネッサンスの建築とし推擧すべきものは、即ち宗教的建築物にあらざる也。吾人が殊に最も彼等に非難し得る處は、其單調にして冷淡なるにあり。されど公共的建築物の中には、よしや茲にも同一缺點の高められたりしことの屢〻なるにもせよ、巧妙にして調和せる純粹の傑作ありて存す。

其創成のものたると、又他より採りたるものたるとを問はず、吾人はローマンチック建築家の建設中に於て、恐らくは此時代全體を通じての最も著しき建築物たる(殊に其内庭によりて)ブラマントの「掌璽宮殿」、バルサザールペルッチの「マッシミ宮」、ジュールローメンの「マダマ別墅」、小アントニオダサンガロ(千四百八十二年—千五百四十六年)の「ファルネーズ宮」及び畫家にして又古典學者たりしピ

ヴイギヨラとパラデイオの時代

エールリゴリオ(千五百八十三年に死したる)によりて、ヴアチカン庭の中央に建設せられたる其纎麗なる「小ビア別宮」等を擧ぐべし。

其建築や、一面クラシック的となりつゝ、而も猶一層の雅致を存したりしヴエニスに於ては、ギヨームベルガマスコがジユカルバレース内庭の正面を興し(千五百二十年)サンソヴイノと稱せられたる彫刻家、ジヤコポタツチが「サンマルクの圖書館」(千五百三十六年)「角殿」及びゼツカの一層純粹なる建築物を興せり。ヴエロナに於てはサンミケリ(千四百八十四年—千五百五十四年)の名、此地を支配す。其同時代者等は彼に關して云ひらけく、『宗教的建築に於て良好に、公共的建築に於て秀拔に、軍事的建築に於て無比なりき』と、而して彼等は其證として「カムバーギヤのノートルダム寺院」、「ベヴイラツカ宮」、「ヌオヴア」、「スツツバ」及び「サンゼノーンの門」を擧げたり。

衰頽の徵光は、古代形式の餘りに機械的となりたる適用と重々しさ及び平凡の漸次並に增大なる性質とによりて、千五百五十年頃より感じられたり。されど其畫と其建築とが、等しく其兩者を有名ならしめたる二人の建築者の列するは、此時代の初めに於て也、一をジヤコポボロツチオダヴイギヨラとなし、他をアンドレアパラデイオとなす。

ヴイギヨラ(千五百七年—千五百七十三年)は、其五式の規約により、近世のヴイトリユーヴと稱せらるべく價したる人にして、見事なる「カプラロラ城」をヴイテルブ附近に興し、又羅馬に「グズの寺院」を建てき、後者のアルベルチを倣したる其正面は、不幸にも之に次ぎたる寺院の大部分に適用されたる典型として存す。

パラデイオ(千五百十八年—千五百八十年)は、或る建築規約の著者にして、一層深く古代の精神を穿ち、其遙かに多く舊習的摸倣に向ひたりしものからヴイギヨラよりも一層また本原的なりき。彼はヴオロナのサンミケリに於けると同じく、其生國たるヴイセンスに技を恣にせり。概して前時代の最も大成したる作に比すべき其傑作は、彼によりて「ヴイセンスの大伽藍」に加へられたる建築と、ヴエニスなる「サンジヨルジユマジユール寺院」となり。彼はコロツサル式との稱を得べき處の、實に屢々地層より屋蓋のコルニースに迄聳ゆるに多少十分に挿入されし其大にして高き圓柱の爭議すべき使用をば漠然と適用したり。其

千五百六十年比の伊太利美術

同時代者ヴァザリ(千五百十二年―千五百七十四年)は、ミケルアンジェロの殊遇を受けたる弟子一人にして、「バレーデオッフィース」をフローレンスの地に建設す。されど彼は、其繪畫(サントマリアデフルールの穹窿)及び「ルーヴルのアッソムプション」によりて一層能く世に知られぬ、而して特に最も其伊太利畫家列傳によりて。

彼は第十六世紀の最中の衰退時代、即ち其才幹を缺如せざりきと雖も、輕妙なることを以てインスピレーションに代ふるの傾向を生じたる時代の最も著しき美術家の一人たり。「カプラロナ城の壁畫」の作者たるタッデオッツッケロ(千五百二十九年―千五百六十六年)と及び「サントマリアデフルールの穹窿」を完成したる其弟フェデリコ(千五百四十二年―千六百九年)とは、其巧妙が彼等の同時代者に幻想せしめ得たりし此等中庸生地の才器の好適例となす。サルヴィアチ(千五百十年―千五百六十三年)と、ボローキュのペレグリーチバルディ(千五百二十七年―千五百九十二年)とには、多大なるインスピレーションありて存せり、後者は建築者にして又畫家を兼ね最秀人物を其周圍に集めたる比喩によりて、文學、科學、美術を表出したる「エスキユリアル圖書館の天井」をものしたりき。而して茲に「基督の地獄降下」に於て、將た又就中其寫眞畫(ルーヴル彫刻の、フローレンスなるエレオノールデストの)に於て、當時猶フローレンス派の大なりしに拘らず、衰弱に瀕せるスタイルの雄建を最も能く表出せるアンジオロブロンチノ(千五百二年―千五百七十二年)と、及び疑ひもなく矯飾したる畫家なりしも、其快心なる着色の手腕を有せる人にして、到處にコルレジオの幸福なる摸擬者とし其才能を示せる(ヴァチカンなる「アノンシエーションと、ペルーズなる「十字架よりの降下」及びルーヴルなる「グローリアスの聖母」と)バロッシ(千五百二十八年―千六百二十一年)との爲めに一地位を存置せざるべからず。

伊太利勢力の範圍、東方に於けるレネッサンス

其如何を問はず、伊太利の勢力は猶歐羅巴諸國に實施せられ、又實施されつゝありし也、而して又亞細亞にも亞非利加にも波及せられぬ。

○露西亞に於ける伊太利美術家の地位の如何なりしかは、吾人既に之を見たり、而して此地位はまた、彼の有名なるマチアスコルヴインがチープルスのペアトリックスと結婚しける匈牙利に於て重用せられぬ。吾人は又ジ

ヤンチールベリニがマホメット二世によりてコンスタンチノープルに呼招せられたりしことを知る。彼は回々教國君主の爲めに働ける唯一の美術家たらざりしも而も猶其恐ろしきサルタンを表はせるベルトルドオ及びスコタンツオのタダルを有し、且つ又サルタンの大臣イブライムが、其宮殿の庭前に肖像を安置せしめつゝ、以て眞の信者を嘲弄したりしことをも知れり。其他に於ては、蠻野なる海賊の爲めに美術家の幽囚されたりしこと一再のみに止らずして、彼のフラフイリツポリツピの小說的生涯に於けるアドヴエンチエアーの一は、即ち是れ。彼れレオナルドダヴインシイが、其大作を製出すべくアルメニヤに迄行けりしことを吾人記憶す。ミケルアンジエロはまた、彼に金角の兩岸を連結する一巨橋を實行すべき旨を任命せんと欲したりしサルタンバジヤゼツト二世の其申出を受けざる能はざりき。ジエノア人とヴエニス人とが、第十一世紀の末葉に至る迄、東方地中海に有したりし殖民地、ヴエニスが千五百七十六年に至る迄サイプラス島に保維しける主權、伊太利が當時尙東方なる、彼等が嘗て謂ふ處の主權なるものを實施せざりし國に於ても、其永く有したりし金融の主要權は、此等の關係を容易ならしめたり。アレキサンドリヤ又はカイロに於ての伊太利の商館は、眞の街衢を形成しつゝありき。茲に於てか吾人は、其伊太利畫家が埃及を通過して、遂に一の基督教國たるアビシニヤに迄行くべく思立ちたりしことを解す。是れヴエニスフランチスコプランカンオーンと其後其甥のニコロとが爲したりし處にして、彼等は此地に主要なる宗教的繪畫を作成したりし也。

よしや伊太利の美術家が爾かく全世界に採用せられつとするも、而も外國の美術家もまた、彼等公衆によりてと同じく其同人によりて、さる對抗的の感情を默止せしめつゝ、此アベニンが過ぎり、海とアルプスとが圍繞するなる美はしの國に於て、其美術が愛されれ、眞摯的最著證の一たる同情を以て受納せられたるなりき。

第四章　中央及び南方歐羅巴に於ける第十六世紀の美術

第十六世紀に於ける日耳曼美術、

種々なる原因は、第十六世紀に於ける獨逸にも、將たフランダーにも、其吾人が期待し得べかりし繪畫の發達を保有することに障害を與へたり。自然の稟性能力に於ての相異は、吾人措て之を論せず、彼れ獨逸は伊太利の如く古代の勢力を利用するの道を知らず、又之を欲せず若くは能はざりし也。蓋し其職工の美術家より餘りに隔離されざらんことは、云ふまでもなく美術に對して可なる處なりと雖も、而も獨逸にありては、此混交餘りに遠くに及び、加ふるに團體の規約なるものは、其美術家の爲めに一大毒毒をなしぬ。アルベルトジエーレルは、ヴエニスより其友なるピルクハイメルに宛て、『自國を出て、の予は、如何に太陽を呼吸するぞや、此處にての予は王侯たり、己が國にありては單に一食客たるの身が』と消息し得たりき。獨逸なる自由都市の主要は、漸次減退するに至れり。其改革は獨逸を新行路に吸引すべく致し、プロテスタント美術の形成さるゝに到

アルベルトジユーレルとフランコニヤ派、彫板、

るまでには、時を要したりし也。抑も此美術は獨逸の外に於て形成せらるべかりしもの、何となれば、其錯雜凝滯に迄進められたる詳密を憂慮するの念に係らず、獨逸人の精神は其興奮されたる一般的インスピレーションの詩的美術に作爲せられたりしを以て、改革が之を限れる小題目に適合することの可ならざりければ也。

されど第十六世紀の發端に於ての獨逸は伊太利と相抗爭し得たるものゝ如く然りき。アルベルトジユーレル(千四百七十一年—千五百二十八年)は、伊太利人によりても、其國人の最大者と才を齊ふする一大家とし思惟せられぬ。

○ジユーレルは、アルプスの彼方に於ての眞の一感嘆の目的たりき。彼は伊太利彫板に對して一の確的勢力を施せり。彼は畫家としてラツフアエルの賞讃する處となり、ボントルモに摸倣され、而してジオヴアンニベリニ及びコルレジオ並にアンドレアデルサルトオに至る迄其勢力を波及せしめき。アルベルトジユーレルは、千四百七十一年ヌレンベルグに生る。當時ヌレンベルグは、美術の主なる中心としてコローギユの後を承け、而して

フランコニヤの派は、獨逸の最第一者たりし也。彼は其父が勉めたりし金工の工場に向けられ、ウォールゲムートの工場に入りぬ。其年少時代よりして、十七人の兄弟姉妹を養ふべく、彼は父を輔助することに其才を利用せずんばあらざりき。千四百九十四年、彼が極めて多く其顔を畫額に寫出したりしアグネスフレイと結婚せり。フレイは其容貌の美なるのみか二百フローニンの嫁資を有し、而して其父は結婚の費を負擔したり。されど其忿怒し易き性質と其貪慾とによりて、彼女は其良人の生命を短縮せしめつ。フレイはジューレルに寸暇の休息だも許さず、其飽まで利殖贏金せざることを絶えず非難し、遂には其友より離隔せしめ、且つ良人を奮奬せしめんが爲めに、「妾にして若し獨身ともなりたらんには、如何なる地位に陥るべきかを思へよ」と絶叫するなりき。

第三十九圖

ボルベイン一騎士死

アルベルトジューレルの最初の畫額は、フローレンスに見らるゝ自己の

寫眞畫是れ也(千四百九十八年)。等しくフローレンスにある其父の寫眞畫は、恐らく之より以前のものならんか。其作品の大部によりて示さるゝ彼が製作の困難は、就中フローレンスなる「三聖僧」の如き其生涯の發端に於ける作品に於て感ぜらる。當時彼は特に寫眞畫に於て秀でぬ(「マキスミリアン」、「ブールゴーギュのマリア」其友「ビルクハイメル」其師「ウォールゲムート」)。彼は最後に於て最も宏大なる畫題に心を寄せたり、即ちサボールによりて注文されたる「一萬の基督教徒の殉難」(千五百七年、ヴェニス)同博物館なる、一に「神聖祭」とし稱さるゝ「ツリニティ」(千五百十一年)是れ也。されど既にして其伊太利旅行に次ての一變化は、其繪畫を考案する方法中に施され始めぬ。自然とは彼が其畫額に置くべく求めたりし冗長なる光景、煩雜にして勞力多き多樣にあらざりしことを認識しき。彼は之を觀察することの餘りに遲かりしを憾みたり、されど豐饒と詳密の積重とに關する代りに、以來必ず其單純と調和とを主たらしめんことを自ら誓ひぬ。マドリッドなる「アダムとエブ」は、最抹法の探求に結合されたる自在と、比較的技倆の廣大とを立證

す(千五百七年)。其生涯の後期に於ての彼は、さる名譽と、さまでの頑齢とに拘らず、比々として其畫風を變更することを憚らざりき、而して吾人は其變更に關して、ミュニッヒなる「十二使徒」を見ざるべからず。彼の才能は、確然として斯く單純にすることに於て得る處ありたりしならんと想はる。よしや此等使徒の像は、其主なる作品中に算入せらるゝものなりとは云へ、問題は茲に置かるべき也。されど爾かく天賦の才能を抱持したりし此美術家が、ヴォールムートの外に師を有せざりしこと及び其少時に於てヌレンベルグの異れる敎育を受け得ざりしことの憾みを許さるゝならん。そは何れにもせよアルベルトジューレルは、美術史上に於ける最大發明家の一人にして、又日耳曼美術の最も完全なる化身者たり。

彼が正確の乾枯に全沒し、形躰最極の起伏をも微細に描出する寫實主義を以て爲されたれども、動もすれば暗黑迷語的に、且つ空漠なると同時に鋭敏にして、朴素なる深き思考、激しき熱情、夢幻的想像の非常なる混交に拘はらず、其空漠たる發明を置くなる圖案の精密によりて、吾人をして其實らしからざるの賞讃を

除義なからしむる所の、其等の奇怪なる小說の作者に想到せしむ。アルベルトジューレルは、繪畫よりも彫板に於て遙かに高き地位を占め、其マンテーギャと共にサルクアントニオとレイドのルカスとの前にありて、近世彫板の始祖たり。其何れの畫額も、「騎士と死」「悲哀」若くは寧ろ「失望したる研究」の彫刻よりもより以上に知られず、其聲價もまた之に及ばざりき。彼は恐らく銅版彫刻の發明者たるべし(千五百十二年)

○彼は彫板者としても其協同を以て寫出せしめたる圖によりて、屢々木彫の發展に寄與したり。彼はまた其一大部分がフランニャ派の一畫家ハンスブグマイエル(千四百七十二年—千五百三十一年)に歸したる「マクシミリアンの凱旋」に從事せり。其皇帝の朝廷、其公共家屋と軍事家屋、兵士と士官、騎士、步兵、砲兵、音樂師、幇間、及び皇帝に從へられたる各國の農夫、皇帝の交戰しける各主權者の代表、諸市の旗を持てる騎士等の列に連ねられたる此續物は、第十六世紀に於ての最も貴き歷史的の一紀念物とす。之を以て其數年以前に出てたる、彼のマンテーギャの作にかゝる「シーザルの凱旋」及びル

第十四圖

（新物語物也維）部上の祭壇畫―マレーヒジトヤルヘリア

サックスの派、クラナッハ、

カスタラナッハの之より以後の作品たる「シャルルカン帝のボロギュー着聲」と比較するは、いとも興味あることたり。

○クラナッハと呼ばれたるルカスシューンデル（千四百七十二年―千五百五十三年）は、フランコニヤのクラナッハ（或はクロナック）とも云ふ）の產なりしかども、其生涯の最大部分をサックスに送り、茲にて自己以後に殘存せざりし一派を創始したりき。

其時日に於て、クラナッハはプロテスタント畫家としての最初の人なり、而してミユールベルグの戰後、其保護サックスのフレデリックと、其俘囚とを共にして聲譽を博しぬ。彼は多作に從事しけるものから、其作品には甚だしき不同ある也（ウイマールなる「十字架に於ける基督」マドリッドなる「王者の狩獲」フローレンスなる「アダム」）

スアーブ派、ホルバイン

ハンスバルヅンググリン（千四百八十年―千五百四十五年）は、スアーブに於てフリーブルグなる祭壇の畫額を描きつ。マルチンシヤツフチルは、其祖國ウルム派の傳說を續けぬ。（ミユーニツヒなる「聖母の死」、シグマリンゲンなる「基督の

降生)。彼が一大勢力を有せんには、餘りに早世たりき。

之に反してアウスブルグの派は、ホルバインを以て其全光彩を放てり。ハンスホルバイン(前の)(千四百六十年—千五百十六年)は、千五百年の頃、「サンポールの傳說」のポリプチック比較(アウグスブルグ)及びミユーニツヒなる「サンセバスチアンの祭壇」(千五百十年)が之を示す如く、其畫風の擴大を輟めざりき。且つや彼は秀逸なる寫眞畫家たりしも。其名聲は殆ど其子にして又弟子なる小ハンスホルバイン(千四百九十八年—千五百五十四年)の聲譽に對して消失せられぬ、彼はアルベルトジユーレルに對峙し得べき日耳曼唯一の畫家にてありたり。

○彼は猶青春にしてバールに來り住し、此處にてエラスムと相交り、次て英國に渡りて、(千五百二十六年)或稀なる不在の時を除きての餘れる一生を其處に送り、ヘンリイ第三世及び其後繼者の恩寵を享けつゝ此地に永眠せり(千五百五十四年)。其材能は日耳曼が產したらん最も明確不羈のものたり、彼は熱烈强烈なる色彩、形狀の充滿、其人物に與へたる生氣と健全との風趣によりて、有らゆる其國の畫家の右に卓出しけるのみならず、往々にして眞美の極致に迄到達す。ドレスデンとダルムスダットとが其原品を有すと稱する「ソルールの聖母」及び「邑長マイエルの聖母」、其餘りに著名ならざる作品なれども、此大家の最も主要なる宗教的作物の一たりし、リスボンヌの「聖師に擁せられたる聖母」は、若し之にバールなる會議堂と倫敦なるイーストハウスの其壁畫の餘りに稀有なる遺物とを結合したりとするも、要は只其才能の不完不備なる一觀念を得るに過ぎざらんとす。バールの會議堂の畫には、共和的感想を表彰する宗教的及び俗界的歷史の光景を表出せり、之れ表出的組合せの高尙なる感と、歷史的の眞とを左證する處の作品たり。イーストハウスには、「富貴と貧賤」の比喩を表描したりき。此略圖今猶ルーヴルに存する此繪畫は、其インスピレーションによりて、木彫知名の續物たる「死の幻影」に似通へり。リオンに印せられたる(千五百三十八年)此等ホルバインの小彫刻畫は、爾來長く人口に膾炙したりし題に於ける類似の、有らゆる發表品を忘却せしめぬ(「死の舞踏」「扮鬼舞踏」)。美術家が常に明晰なる想像力を以て、同一の主意を種々變化せしめたりし其滑稽にして又悲劇的

彫刻、クラフト、サウルル、サンイの聖骸函、ルスセスクインスプ
ルキシツミクリなるマ
コレのキサンドルアンの紀念牌、

なる此等の作品はパールに於て製作され、以て彼の千八百六年に破壞されたる「死の舞踏」の上に、優然其名聲を寄與する處ありたりし也。

ホルバインはまた精醇なる光澤畫家なりき、されど就中最も賞讃するに足る寫眞畫家たりしのみならず、此種のものに於ての其甚く相異れる畫風の下に殆どチチアン及びヴアンダイクの好匹敵をなしぬ。「ミランのクリスチャン」の寫眞畫、ドレスデンなる「金工モレット」維也納なる「ジャンヌセイムール」並にルーヴルなる「クレーヴのアンヌとエラスム」を擧ぐれば思半ばに過ぎん。されど此單純と此自由とは、日耳曼派に於て稀有の性たり。

既に繪畫に於て危險なりし其複雜に對する日耳曼人の精神上の此傾向は、猶ほ一層彫刻に於て不利なりき。されど千四百六十一年維也納のクコラスレルクによりて始められ、千五百十三年ミカエルデイヒテルによりて終へられたる「フレデリック第三世の墳墓」は、壯大にして新機軸を擅てたる作品たりとルプケ氏は云へり。ヌレンベルグは其繪畫に於けると均しく、アダムクラフト(千五百七年に死したる)と、及び殊にペテルウイスヘル(千五百二十九年に死せる)とを以て、彫刻に於てもまた主たる中心をなせり。アタムクラフトは、其情に關する光景に於て、一の以心傳心的の感動を示し、又時として崇高なる感をも示しぬ。其甚だ異りたる一性質のものに於てのボワビユブリックなる正面の凸彫刻は、寬濶にして素朴なる想像力を證す。

ペテルウイスヘルに關しては、正に是れレネッサンスの最大美術家中の一人たり。彼は永らく日耳曼に實行されたりし鑄物術が、代々に相傳せられて、完成されつゝありたる一家族の出なりき。其父ヘルマンは千四百五十七年に於てウイッテムベルグの洗禮盤を作りぬ。而も彼の後に永く此技を殘すべかりしものはペテル即ち其人なりし也。彼が其子五人と共に十三年間(千五百六年—千五百十九年)働きたりしヌレムベルグなるサンセバルドの聖骸函は、日耳曼彫刻の傑作となす。聖者の神詫を想起すなる凸彫刻、其聖者の肖像と及び、手に鐵槌を持ち鞣皮の大なる膝かけを着けたる樣を採取せる作者それ自身の肖像とは、圓柱に彫せられたる十二使徒が高大の氣品に滿ち、圓柱の基部に置かれたる比喩像がフローレンス人にふさはしき雅致あるものたりし間に、日耳曼寫眞派

に向つてインスピレーションを賦與したるなりき。總べて此等の彫刻は、よしや其容積小なりとするも、優に紀念物的性質を有すと共に、此等の像は、此美術家が其紀念碑の支臺の爲めに與へんとの奇異なる思想を有しぬる夫等の巨大なる蝸牛の作に迄も見らるべき形體の整正と、形式の價値とによりて秀でぬ。此作に對してウイスヘルの伊太利に在りたりしを否定せんは困難の事たり。實に彼はマキシミリアンの存命中に於て、其寵愛畫家たりしジョオルジュセスルシュライベルの指揮の下に、インスブルックなるホフキルクに、其建築に着手せしめたる墳墓に從事せり。畫家とし兼ぬるに彫刻家たりしセスルシュライベルは、彼自身肖像の一大部分を作したりしが、此墳墓こそは世界の最も著しき彫刻的集合の一たるなれ。或は歴史的傳説に於ける英雄と女傑、或はオートリッシュ家の人物(ウイスヘルの作にかゝる英吉利のアーサー、テオドリック及び他の作なるクロヴイスフイリップ一世、ジャンヌラフオル、フエルデイナンドルカトリック、ブールゴーギュのマリ・ア等)を表出せる二十八の巨大銅像は、白大理石の一碑の周圍に、其冠冕の如く又儀仗兵の如く並列せり。此碑の上には皇帝の肖像を載せ、其四隅は同じく銅製にして、四方の德を表頌せる四像によりて飾らる、此碑の諸像は、其之を飾れる凸彫刻をものしたるアリンヌのアレキサンドルコリンの型によりて鑄られ、他の四銅像はコローギュのピエールとグレオワールアベルとの鑄造する處にかゝれり。

木彫、工藝

○木彫は成効を以て其實行を經續せられぬ(クラコヴイヤなるウアイトストッスの作たるヌレンベルグのクーロンヌドローズの名の下に知られたりし「聖母の生涯」の凸彫刻等)。金工は就中甲冑と劍欄とに燦然として輝き、ヌレムベルグは其中心にして、且つヒススコウオーゲル家の秀拔たりし處の製陶其ものゝ中心にてもありし也。

建築、ハイデルベルク、クローンブルク

○建築に於ては佛蘭西に於けると等しく、此世紀の後半に至る迄も、其ゴチック式が最も夥しくフリブルグ及びストラスブルグに於て宗教的紀念物に存しつゝありたる間に、レネッサンスは之に先んじて或はブレーグのベルヴエデールの如く伊太利人の作たり、或はコンラッドクレブスの手になりたるトルゴー城(千五百三十二年)又はカールスルーヘの附近なるゴッテサ

フランダー、アンヴエールの隆盛、ケンチンマッチース、ローマンチツク派と國民的傳說、ヴアンオルレイ、滑稽ブルーゲル、寫眞畫家

ウ城の如く日耳曼人の作たる、其公共的建築に現はれたりき。此時代の最も有益なる建築物は、第十六世紀の中葉より第十七世紀の中葉に至る迄の日耳曼に於ける此技の種々なる變化の跡を尋ね得らるゝハイデルベルグの城即ち是れ。メクレムブルグは、設令伊太利より最も隔離せる日耳曼の邊境たりしにもせよ、其レヂッサンスに向ひたる最初者の一たり、されどウイスマール(千五百五十三年)シユウエーリン(千五百五十五年)及びグストロウの諸城は、彼の丁抹に起設せられたるクローンボルグ(千五百七十四年)と、フレデリックスボールグ(千五百六十年—千五百七十年)との本原的性質を缺如す。

第十五世紀の末葉に於てのアンヴエールは、フランダーに於て首位を占めたり、而して其隆盛は、此世紀の後半に至るまで漸次增大するのみなりし、フイリップ第二世の專政と其內亂とは、之を抑留することなしに妨害するを致しぬ、何となれば此內亂は軈て北方の諸ブロヴインに集まるべかりしを以て也。吾人は其河上に二千五百以上の船舶を見たること屢々にして、毎週二千の河船茲に着きつゝありたるなりき。有らゆる工藝の活潑なりしことはヴエニス人其者と雖も之を凌駕し得ざる程にてありたり。此美術優秀は經濟的及び政治的の優秀に相隨伴せり、是れ往々にして見る處の現象となす。世人は千五百六十年のアンヴエールに於て、三百六十人迄の畫家と彫家刻とを算せり。第十五世紀末よりのアンヴエールは、舊鍛工、ケンチンマッチース(千四百六十年—千五百三十年)の爲めに、フランダー美術に於ける首席を占得したりき。彼の寫眞畫(ルーヴルの「銀行家と其妻」フランクフオルドなる「男子の寫眞」)は、其派の有らゆる堅實なる性質を保てるを示せり。其時代の最も著しき作品中に算せらるゝ、アンヴエールなる「基督の昇天」ルーヴエンなる「サントアンヌの傳說」(千五百九年)は、猶且つ詳密を全躰に隷屬せしめ、單にシムメリトーを組合せに生ずるのみならざる齊一を與ふる爲めに、屢々都合よき一努力を證左す。此等の繪畫は、正しくアルベルトジユーレル及びホルバインの賞讃を決定したり。されどマッチースは何等の方法によりても、些も伊太利レネッサンスの感化を蒙らざりき。

然れども此勢力感化は、其死の際に於て、既により若くは此美術家の上に及ぼさ

れにき。此勢力は、先づ該派を迷はしめぬ。フランダー人は、既に爾かく堅牢なる其國民的繪畫の此傳說と、彼等が常に甚だ好く了解せざりし處の新敎育との中間に逡巡として躊躇したり、かるが故によしや才物の多く散在したりしとするも、其作品や往々雜駁にして大性質あるなし。此等のローマンチック派の泰斗は、既に正しく之を想起したりし如く、伊太利にありてはラッファエルの門に於て一派を形成し、其ラッファエルよりフランダーに來りて、彼の有名なる畫を花絨に製すべく督任されたるベルナルドヴァンオルレイ(千四百八十年—千五百四十二年)其人是れ也。

○此等のラッファエルの傑作に接したることは、其花絨製造者に於けると同じく、畫家に對してもまた一大活動の影響を及ぼさずんばあらざりき。されどブラッセルの「ジョッブの苦楚」アンヴェールのサンジャックなる「最後の判決」が證する如き或才幹よりして彼れヴァンオルレイは、其感得したりし伊太利と比肩すべく餘りに遠くありたり、何となれば彼は屢〻困難を感じつゝ其矯飾憂悶したる痕跡存すれば也。ミケルコックシイ(千四百九十九年)は、熱心なるラッファエルの摸倣者にして、其弟子たらず、又一層冷淡寒枯なりしも、而も遙かに單純たり。フランツフローリス(其眞の名はヴリーンツット……千五百十五年—千五百七十年)に關しては、彼はミケルアンジエロを摸擬し之を誇張したりき。

最も完全なる作品をものしたりし其伊太利化せるフランダー畫家は、明かに伊太利人となりたりし人々也、即ちヴェニス派の最大寫眞畫家の一人にして、其作品が動もすればチチアンのに歸せられたりしジャンドカルカール(千四百九十一年—千五百四十六年)、第二ボローギュ派の始祖たるデニスカルヴァエール(千五百四十年—千六百十九年)の如き是れ。そは兎もあれ伊太利主義は、第十六世紀の初頭より、其文學に於けるが如く、美術に於てもまた勝利を占めにき。伊太利に於て爾かく強く賞讃されたるアルベルトジュエールはフランダーに來りし時に際して其才幹を誤認せられぬ。相繼承してネザッランドを統治したりしシャルルカンの姪と妹とは、十分新派に對して同情の意を表したりき。

されど是れ多數畫家の間に國民的趣味を維持すべく些の妨障をも與へざりき。吾人は先づ、彼のジャンドマビューズと呼ばれたりしジャンゴッサエル(千四百七十年—千五百四十年、)ツエイのジャンベルガンブ、並に其傑作は、今ルアンの博物館に存するゼラールダヴイッド(千四百六十年—千五百二十三年)及び次の時代にジオッスヴアンクレーザ(千四百九十一年—千五百四十年)と、マリヌス(千五百年—千五百六十年)の如き「最後のゴチック」とを有す。次て又吾人は、社會の最下級に其モデルを求めたりし「農夫のブルーゲル」若くは「滑稽ブルーゲル」と云はれたる前のピエールブルーゲル(千五百二十六年—千五百七十年)が、神話と華麗との大に歡迎せられつゝありたる時に於て出づるを見る。要するに何人の目をも悅ばす處なかりし此美術家の新機軸は、常に十分に評價せられざりし也。彼はフランダー人と和蘭人とが、次の世紀に招致すべかりし其種の繪畫の祖たりしも、當時のブルーゲルは一例外とし見做さる。殊にフランダーの秀拔たりし處は、其寫眞畫にして、彼の反對の二勢力が最も能く、且最も夙く相調和し始めたりしもの是れが爲めとす、されど國民的傳說は、其最も有名なる寫眞畫家たりし老ポルプス(千五百十年—千五百八十三年)及びニコラスヌフシャテル(千五百二十年—千六百年)さてはトーマスクーをすら支配したりき。終に吾人は其繪畫に於てこそ餘りに多く知られざれ、要するに彼の「畫家集」によりて名聲喧々たる、ネザーランドのヴアザリ、カレルヴアンマンデール(千五百四十八年—千六百六年)を忘るべからざる也。

和蘭に於ける繪畫、レイドのルカス、クロマンチツク派、寫眞畫、ヴアンモール

花絨

○繪畫の派はまた花絨に對して畫かれたる板紙に於て區別せらる。ヴアンオルレイの筆になれる「マキシミリアンの狩獵」ヴエルメーアン(千五百年—千五百五十年)の筆になれる「チユニスの征服」は、嘗てより一層卓越を歐羅巴に保維したりしツールネイ、ブラッセル及びブリユージュの花絨に對しての價値あるモデルたり。當時「アロストの畫家クーク」に、其成効を以てコンスタンチノープルに花絨の一製造所を創設せりき」。(ムンツの美術史)

北方のチザーランドに於ては、其美術的の地位相類似す。吾人は先づ此地にヴアザリが、アルベルトジユーレルの上にも置ける處の、就中彫刻家として有名

なる、彼の一大國民的美術家たるレイドのルカス(千四百九十四年—千五百三十三年)を、マッチーズの同時代者中に見るべし。レイドのルカスは其最初者の一人として彫板に光線の作用を加入せしむることを知れり。彼がサントユーベルの畫額を作りて夙く美術家の驚嘆を博せりしは其齡僅かる十二歳の時なりき。其主なる作品はレイドの「最後の審判」とす。其性質の高尚にして寛恕なりしは、其才幹と對比せらる。

○次て羅馬なるベルヴェデール博物館の保監者たりし後、其國に歸りてラツファエルの摸倣を擴布せしめんとしたるジャンショオーレル(千五百六十二年死去す)來りぬ。かくてまたミケルアンジエロの派はマルチンヴアンヒームスケルケ(千四百九十八年—千五百七十四年)及び特にハルレムのコルネリス(千五百六十二年に生る)を以て其主宰者となすべし。

眞の和蘭美術は、フランダー美術よりも一層長く、此過渡の時代より脱離するの狀態にあるを致しぬ。ルベンがアンヴエール地に覇を唱せるの間和蘭派に於て最も人の目標に立てる代表者は、伊太利主義の主宰すなる美はしの神話的比喩畫を以て其名を得たるアダムブレーマルト(千五百六十五年—千六百四十七年)と、ハルレムなるコルネリスの遺風を傳へたるピエールラストマンとなり。されど茲に其光澤の作によりて伊太利に一大名聲を博したるジエラールドホントルスト(千五百九十年—千六百五十六年)。を加へざる能はず、彼は家族的光景、宗教的及び神話的畫額をものしたりき

海洋畫はヘンリイウルーム(千五百六十六年に生る)を以て、建築畫はヴレデマンドヴリース(千五百二十七年に生る)と其弟子、ヘンドリックステンウツク(千五百五十年—千六百四十年)とを以て始まれり。

其フランダーに於けるが如く、和蘭に於ての此時代全躰の間、アントニオスヴアンモール及びアントニオモロ(千五百十二年—千五百八十一年)、次て次の世紀の初頭にミールヴエルト(千五百六十八年—千六百四十一年)と其弟子モーレルス(千五百七十一年—千六百三十八年)、並にトマストゲーセル(千五百九十五年—千六百七十九年)及びジャンドラヴエスタイン(千五百八十年—千六百六十五年)を以て此派の名譽を有したりしは、即ち寫眞畫是れにして、モロはマドリッド博

物館なる「シャルルカンの王女」及びジュカテル伯によりてルーヴルに寄與せられたる其二個の繪畫の如き眞の傑作をものし、而して後の四人者は、其隆盛時代の曉曙を告げたる美術家にして、吾人は之をレムブランットの先驅とし見做すことを得ん。

玻璃畫

○玻璃も亦千五百五十五年より千六百三年に亘りて、クラベット兄弟及び其門下等によりて製作されたる、彼のグウタ寺院に於ける四十四玻璃窓の如き第一流をなす作品を產出せり。

建築

○建築に於てとしての火災狀ゴヂック式は、グウタの寺院、及びヴアンウアーゲマーケルとロムブウットレルデルマンとの作なるガン市廳の其正面に存す。レチッサンス的の式は、千五百六十一年より千五百六十五年に亘りて、ヴリーンットのコルヲリスによりてアンヴニールに建立せられたる其市廳に現はれぬ、されど其カテドラールの尖塔と禮拜堂とはゴヂック式にて終へらる。

彫刻、ブールゴーギユなるマリアの墳墓

○彫刻も亦チザーランドに於て二三主要なる作品を製產したり。ブールゴーギユなるマリアの墳墓は、千四百九十五年より千五百一年に亘りてブラッセルのピエールドバケルによりて作出せられぬ、此作物の正確なると纖麗なるとは、彼のシャルル敢王の爲めにジョンジュランによりて建設せられたる其側の紀念碑をして、殆ど顏色なからしむるが如き觀を呈せしむ。ブリユージユなる裁判所の暖爐は、千五百十八年と千五百二十九年とにギヨボーグランの手に製作され、其大理石の凸彫刻の上には、木彫肖像のシャルルカン、マキシミリアン、ブールゴーギユのマリア、ブエルデイナンルカドリック及びイサベラの自然大像をもて裝飾せられたり。

佛蘭西のレチッサンス、伊太利勢力の傍に於ける國民的本原性の存續

第五章　西方歐羅巴及び主として佛蘭西に於ける第十六世紀の美術

佛蘭西に於てのフランダーの感化勢力が、其甚だ瞭乎たる狀態にて此美術の上に影響したりしことは、吾人之を諒す、されど伊太利の勢力感化は茲に白耳義よりも一層速かに一層深く、而も國民的本原性を收斂するなくして其感化を及

ぼすに至りぬ。

若し夫れ繪畫に對しての佛蘭西派は、或は人後に落居せざるべからずして、其ジャンフウケの生出する迄の以前に於ては、有らゆる希望の一片だに保留し能ふべからざりきとせんも、彫刻に對し、若くは殊に建築に對しては、其匹敵者と優に第一位を競爭し得たりし也、而も佛蘭西が其隣人に負ふ處のものを否定することなく、所謂近世美術の其土に現實すべく伊太利との觸接に要ありしことを許容しつゝ、不思議にも佛蘭西人それ自身に對して甚だ正當を缺ぐるものたらざるなきを得ざりき。

○之を示す處のものは、其國民的演說が伊太利に對抗する底の抗抵即ち是にして、實に數多の新來者が其勢力を附課する代りに、却つて其佛蘭西の國民的本原性を蒙りたりし程事實也。彼のベルニンがルイ十四世によりて佛蘭西に招呼せられたる時にだも亦然りしなりき。ヴイオンルジユツク云はずや『シャルル第八世が彼と共に導けるフローレンス若くはミランの美術家等は、佛蘭西に於て有らゆる美術的の分科を有し、外國人に左右せらるゝことの少かりし其有力なる職業の團躰を會合したり。彼等は其美術的智識に滿てる專門的一大熟達の人物に對し、又伊太利人の饒舌なるに對するに、一種失望の惰性を以てせるものから、其嘲弄者、狡猾者、不柔順者、拙劣者として存じぬ』と。されど是れ佛國美術家の此抵抗が、其システマチツク若くは、盲目的なりしことを云ふにあらず、斯くて是れ最も能く、而も判定と撰擇との十分なる自由に於て、アルプスの山脈の彼方より來りたる敎育をば、如何に利用すべきかを了知せる佛蘭西人間の最も强く形成せられたる美術たりしことをも忘るべからざる也。之に反して繪畫が其成効を以て此途に入るを得たりしは、僅かに次の世紀に於てしたり。

伊太利の戰爭
佛蘭西に於ける伊太利美術家のフランスの派

○そは兎も角、是れぞ佛蘭西政權の憐むべき變化の徵にして、恐らくは今猶其悲むべき結果を殘しつゝある、彼の伊太利に於けるシャルル第八世の遠征は、到處佛蘭西の人心に一大動搖を導けりき。而して此勇敢なる兵士と、輝々たる紳士との多くを遠方に誘致しける出來事によりて、如何なる點に迄其注意が激烈なりしかは、佛蘭西、否な近世の歐羅巴に於て起りたる定期

刊行の其最初の論文の如く思惟すなる廣告書、伊太利の大軍の廣告書然としたるものを刊行せる事實によりて考へ得らるべし。

佛蘭西に於てこそ斯くの如き新聞を熱望したれ其遠征に參加したりしものは、伊太利の夫等の「勝ち誇れる」市府にありて、痛くも感に打たれつゝありたる也。僧正プリンネは、ブルターギュの女王アンヌに一書を送りて曰く『拙僧は陛下が此市(フローレンス)と此處にある美はしき物とを見そなはせられたらんことを望む、何となれば、此處ぞ眞箇地上の樂園たれば也。此等の處の美をば十分に、其有らゆる種の此世の快樂に當篏め給はんことは不可能事たり』と。されば、ルイ第十二世の時代及びシャルル第八世の時代より得たる此土地を又容易に失ひたる其缺點に對して、彼等の大人物は、其美術家と美術作品とを佛蘭西に得んことを求めぬ。されど伊太利に於て、彼のバリユストルと共に彼等を驚倒せしめたりしものは、建築其物にあらずして、日毎〳〵の生を美化し、若くは容易ならしむる底の美術是れなりき。彼等は殊に最も園藝家、指物師、畫家、金工及び技師の類を佛蘭西に導かんと欲せり。此伊太利美術家の第一次佛蘭西移住に於て、ヴエロナの建築家フラジオコンド(千四百三十五年—千五百二十年)モデーヌの彫刻家ギドマツツオニ、ベン、ギルランダショ及びソラリオ等を擧ぐべし。

此等美術家の例範は、眞箇レネッサンスの王たるフランソワ第一世によりて其趾を追はるゝことを缺かざりき。王は巨額の費を投じて古今の美術作品を求め、かくしてルーヴルの最も貴重なる畫幀の數多を得られたり也。王は佛蘭西の地に伊太利の最大人物を入らしむべく、其爲し得たりしことを爲したりしも、ラッフアエルもミケルアンジエロも其申出てには預らざりしのみか、レオナルドダヴインシイの如き、只死せん爲めに此地に來りアンドレアデルサルトオもまた、單に足を此地に入れたるのみなりき。王は此時既に其衰頽の微光を示しつゝありたる第二流の美術家を招ぎぬ、即ちセリニとロッソ(千四百九十六年—千五百四十一年)及びボローギュ人プリマチース(千五百四年—千五百七十年)等是れ。其ロッソとプリマチースとの兩人は共に殆ど同時に於て巴里に呼ばれ(千五百三十年—千五百三

第十五世紀末葉に於ける佛蘭西の美術、ツ、ルミケル、ジャンフウケ、ジョルジュ、ヤンペン、コロン、給畫、カ

十一年)。プリマテースは其對手の悲慘なる死後、聊か誇大の嫌なきにあらずと雖も、其フォンテンヌブロウ派と稱せりし伊太利人と佛蘭西人との美術家の一團の最高指揮を取りたり。彼等は疑ひもなく其名にし負ふ城壁を繪畫にて蔽ひたりしも、其處には眞の派なるもの存せず、換言すれば存續的傳說の形成若くは、少くとも永く斯界のモデルたるべき優拔なる作品の一躰を存せざりし也。

第十五世紀の末葉に於ける佛蘭西の美術は、其主なる中心としてロワール中流の地を持續したり。これジャンフウケの生產地にして、且つ次代に屬するミケルコロンの出生しける處也。コロンは其年代に於て佛蘭西近世彫刻家中の最初者たり(千四百三十一年?—千五百十二年?)。彼は其先驅者たるの正確を保守しつゝ、一方に於て其等複雜の弊を脫離することを了す。彼は其同時代のフローレンス人よりも博識たらず、又特徵をも有せずして、夙に一大スタイルを有し、其之が合作と其凸彫刻とに於てカイヨンの城より來れるルーヴルのサンジョルジュが之を示す如く、一層明白にして、恐らくはより一層能く均衡を保つ處の或ものを配することを知れり。其主たる作品は、ブルターギュ公フランソワ第二世の紀念碑と其後妻マルグリットドフオワ(千五百七年)となり。其紀念碑の下に臥せる自然大より大なる肖像に於ても、紀念碑の四隅を劃する自然大の四德の像に於ても、其側面を飾れる聖者と英雄(シャルルマーギュ及びサンルイ等との肖像にありても、また最後に黑大理石の頭と手とを有せる、泣ける七兒童の像にありても、其要處に從ふて單純强固若くは才氣迸溢の手腕を示せり。彼はまた他の彫刻者と共に、千五百十一年より千五百三十六年に亘りて、續いて建設されたりし、「ブールボンのマルグリット」「フィリップ善王とオードリッシュのマルグリット」の紀念碑及びブルウの寺院に從事したりき。吾人は今日ツールなるシャルル第八世の王子の墳墓が、彼の指揮の下に、ルグノールとジエロームドフィエゾールによりて作せられたるを知ると共に、バリユストトル氏がソレスムの彫刻中の一部分を彼の作に歸せりしもの、其事實なるべきを思ふ。

されど若し吾人にして、其同時代人の證左する處を信ずとせば、該時代の最も著しき佛蘭西美術家は、もとリオンの出にしてルイナ一世王の畫家の子なるジ

ヤンペレアルなりしが如し。彼はマロによりて表彰さるゝの名譽を有しぬ。畫家にして技師たり、建築家たりし彼は、サンツの墳墓とブルウの寺院との設計をなし、而して特に起るべき大事件を畫布上に複出せしめんが爲めに、ルイ十二世王は彼を伊太利に伴ひ行きたり。吾人は此戰役の主なる戰闘即ち「アギャデルの戰」等を描寫しける其主要なる面積の繪畫を彼がものしたりしを知る。其後彼はより溫雅なる使命と、より深遠なる性質の事に任ぜられき。即ち其ルイ十二世が、英吉利のマリアと結婚すべかりし時に際して、佛蘭西風に英國女王を裝はしむべき廷臣の業を監すべく、倫敦なる王女の許に派遣せられたりし也。されど此美術家の作にかゝる其眞正なるもの今や一も存せずして、嘗て彼のに歸せられたりしサロンカレーの畫額すら甚く世の拒否する處となりぬ。之に反してジャンブールデイションの才能は、吾人之を判知することを得る也。彼は實に、千五百八年に終成しける「アンヌドブルターギュの祈禱書」の、其賞讃すべき微細畫に於ける唯一の作者たりしに似たり、而してピエールドボージュウ及びアンヌドフランスの寫眞を持つムウランの三折扁額は、恐らく彼のに歸ぜざる能はざるべし。果して然らんには、此等の扁額こそ、舊佛蘭西繪畫の最も主要なる作品と云ふべけれ。

之を佛蘭西建築に見るに、就中其公共的建築物に於て、概ね窓に與へられかる直線の十字架をなせる區劃に直角形を配せしめ、以て如何にゴチック式の變化せられたるかを示す處の傑作を產出したり。ルアンの裁判所は、クリユニーの館よりも、將たダリユイユの廳よりも、若くはシャトードブローの最も古き側面よりも、より遙かに此式なる建築物の典型を存しつ。此裁判所はローランルルツと、ロジエールアンゴとの作する處。其ゴチックの一式は、明かに宗教的建築物によりて保留せらる、即ちルルウの作にかゝるルアンのノートルダムの正門、及び同市のサンマクルウの寺院之を立證す。而して這般の工事を監せりしもの、是れルアンの大僧正ジョルジユダンボワズ其人となす。アルビなるカテドラールの裝飾は、正に同時代に屬せり。柱上に支持さるゝ眞筍の天蓋をなす其白色石材よりなれる玄關は、煉瓦建築の赤色圍魂の上に分離しつゝ、以て一偉觀を呈するの結果を出し、ジユベ(寺堂中なる步廊樣の長臺)と頌歌堂の圍柵は、其

レネツサンス、第一期の建築、アルルの裁判所、ジユ、ダンヨルルアウ、ボルツ

薄紗と石彫とを以て未聞の富瞻を極め加ふるに雅麗燦爛たり。佛蘭西派は裝飾を支配し、フランダーの勢力は人物を支配す。此等の工事は僧正ルイ一世ダンボワズの爲めに、千四百七十三年より千五百二年に亘りて爲されぬ。其穹窿と禮拜堂との繪畫は、平凡にして子細に驗するの價に値せず、そはルイ一世(千五百二年—千五百十三年)の朝にして其後繼者たるルイダンボワズ二世より招呼されたる伊太利裝飾畫家の一移民の作にかゝる處。

ルイダンボワズは、美術保護者中の第一流に位置す。彼等中に於て最も有名なるルアンの大僧正は、其時代の眞のメセーヌにして、佛蘭西に於けるレチッサンスの眞の誘導者たり。彼の庇護の下にノルマンディに於て成されたる工事の、而も佛蘭西式に價せざりしを見る。其同時代に於て彼が工事を興さしめたる「ジャトオダンボワズ」は、封建的貴族の邸宅より、王侯的第館に至る過渡を劃せり。其巨大なる塔樓は之に城砦の風を存するにも係らず、一層雅麗なる建築の混合錯交をなす。彼が其新第宅をガイヨンに建設せしめたの時に際し、此等の塔樓は消失せられてぞありき。ガイヨンは伊太利美術家の作る處ならずして、

第二期、フランソア一世式シャンボール、シュンソオ、

正に有らゆる佛蘭西建築家の作する處(ギョームスノール、ピエールフアン、ピエールドロルム、コランビアール及びピエールヴアランス等)。ガイヨンは破壞せられぬ。されどシューモンシエルロワールと、メイヤンは、猶アンボワズ家に名譽をなしつゝある也。

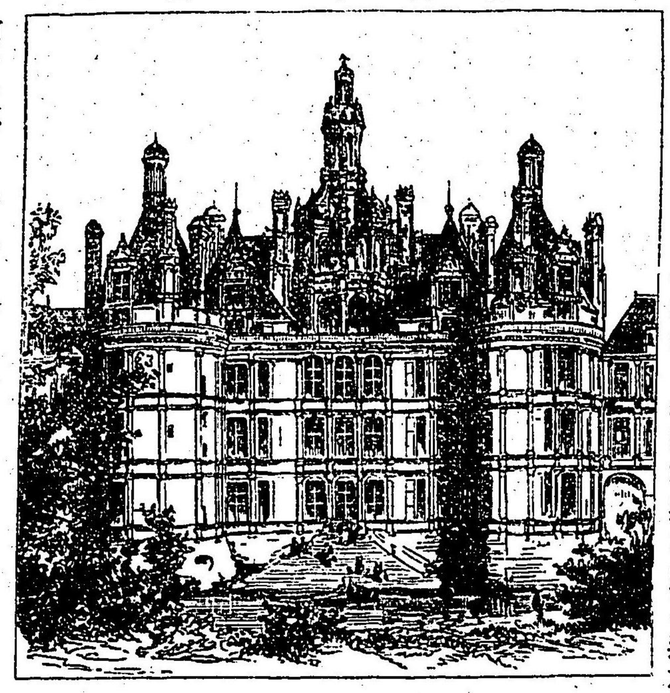
嚮て佛蘭西の種々なる部分に向つて、舊建築物の變更若くは全然新なる建築の安居別邸建てらる。此等の居宅にありては、壁は廣窓に穿たれ、到處に空氣と光線とを透過せしめ、又之に小亭、庭園、築山、泉水等を配せり。

ベイエ氏曰く、『細密にしてゴチック式なる、古代式に伊太利風を混和する、其富瞻にして放肆なる一裝飾は、有らゆる方面より發達したり。居宅は甚だ多く佛蘭西式を存せりしに拘らず、當時の社會に關係する一切の好奇心、總べての勢力に開放されつゝありき』と。佛蘭西の建築者は、此種の新建築に於て其第一流を占位しき。彼等は其諸性質を收集したることによりて以て伊太利と比肩し、其力能と想像力の自在なるとにより、設計の寛濶なるにより、又殊に建築其物を該用途に適應せしむること及び其ロジックとによりて、敢て伊太利人をすら

瞠若たらしめぬ。レネッサンスの原則によりして洽く主宰されたる當時に於て、古代の紀念物と伊太利近世の夫れとを熱心に研究したりしフィリベトルヅロルムは、猶『壁の裝飾と、富瞻にすることゝを知らざらんことの一層望ましく、却つて個人、財産の保監及び人身の健康に要することを能く解せんことこそ大に望ましけれ』と云ひたりき。千五百二十三年に始められたるシャンボールはフランソワ一世式の完備せる典型たり。

○一百五十六メートルに一百七メートルの其矩形の端に於て、猶ほ圓錐形の屋根に終せる大なる圓形樓を存せり。此建築物は以前塹濠を以て包まれたりき。第十六世紀のヴエルサイユ宮なる此シャンボールが、其宏大なるパークを通ずる長道の盡頭にありたりし時には、小亭、小丘、歩廊、烟突、亞鉛の屋蓋、露臺、小樓、尖頭、及び小鐘樓等を以て現はれ、眞箇一の偉觀を呈出したり。ヴエニスの一使節は、モルガン若くはアルシンヌの魔宮の詩人が作りたる記述を其眼前に現實したるものゝ如かりし此美はしの建築物に優れるものは、未だ嘗て一たびも之を見たることあらじとの確言を敢てしぬ。

第四十一圖



シャンボールの建築者の名は、輓近に至る迄不詳にありたりしが、今や吾人は是を以てブロワ若くはダンボワズの産にしてメヴイと呼ばれたりしピエールトランコオに歸せざるべからざるを知るに至れり。

其シャンボールよりも遙かに多く本原的の城なるシュノンソオの設計をなしたりし建築者の名を吾人は逸せり。されど吾人は、シエールに屬す

河を通ずる橋上に建設されたる其一部分は、フィリベールッロルムに屬す

るものたることを知る。其他の多くの作物が、如何に引續きて詳記さるゝに價するかよ、されど吾人は茲に其一例として、彼の偉麗なる階段を有する世に「ブロワのフランソワ第一世」と稱呼さるゝ處の隱宅、其アントワンヌの作にかゝる「ラロッシュフウコール」「アゼエルリドオ」「シャトオダン」「アッシュ」、ピエールガディエの作にしてガチアンとシャンフランソワとが七寶畫の大板をもて其正面を裝飾したりしものにして、千八百二十六年に破壞し了られたる「ブローギユの森のマドリッド」及びピエールシャンピーシュの從事したるサンゼルマン、並にジャックルブルトンとギヨームルブルトンとの合作なる「ヴイレコッツレ」等を表記して以て滿足せざるを得ず。ギヨームルブルトンは又フオンテンヌブロオに於て、伊太利の美術家ロッソ及びセルリオ等の傍に其之と等同なる畫作に從事したりき。

之と同一性質は、自治市邑の建築物と個人の邸宅とにも現はる。千七百七十三年に破壞されたる實に賞讃すべき紀念物にして、今や只其彫板を見るのみなるシャローンの市廳、シャンカロンの作なるアルラの市廳、シャンドレピンヌの作にかゝるアンジエールなるバンセエ館、ルアンなるメーゾンドデイアーンヌドボワチエと、ジユブールテルールド館及び多くのオルレアンのメーゾン、さてはツールズなるダッスザ館、ヲスボルド館、ブルーシユなるキュジャ館並にフオンテンヌブロオの近郊より巴里のクールラレーンヌに移されたるフランソワ一世の第邸等は正に雅麗と調和との種々なる典型たり。這般種々なる建築物に於ける裝飾の一特色は、石塊大形メダルの使用是れ也(シャトオダッシエ、シャトオトポー、及びシャトオドリオン等)。

古代建築より感得されたる分子は、フランソワ第一世の晩年より興されたる建築物に一層大なる地位を取り始めたりしが、此時代の建築家は、文章家にして且つ理論家なりき。巴里、イルドフランス及びロワール地方の後に於ける美術的主要の中心は、當時ノルマレディ(カアン)、シャンパーキユ(トロワイユ)及びツールズの地方にてありたり。方形的建築は、概して井然たる建築物の角隅に對する圓形の塔樓に代用せられつ。千五百四十年より千五百四十七年に亘りて

第三期、アンリ第二世式カンデリシヌ、ドヒエメ、ルレコ、ルヴルス宮、ルーブリ宮、チルイリー宮、ツロイエ

モンモランシイ元帥の爲めに建設されたるエリウアンのシャトオに於て、ジャンビユラン(千五百十年—千五百七十八年)は、四面悉く相異れる內庭に對して、古代と伊太利とが其モデルを與へたりし種々なる列柱法式を求めぬ。殊にアンドルウエジユセルソオは、爾來破壞されにし多數の美なる作物の圖を、吾人に傳ふるなる其佛蘭西最秀建築物の圖集によりて有名なり。當時多くの美術家を主宰したりし二人の偉物ありき、一はルーヴルの建築者ピエールレスコ其人にして、他はチユイルリーの建設者フイリベールツロルム其人是れ。

○クラギイのシールなるピエールレスコ(千五百十年—千五百七十八年)は巴里の議會に於ける一議員にして、ジャングウジョンと友たりし人。世人は嘗て其好事にも建築家となりぬる此立法官を嘲笑しけるが、サンジエルメンオウクセルロワのジユベ(千五百四十一年—千五百四十四年)及びリーギユリの館、次てカルナヴアレ館(千五百四十四年—千五百四十六年)等の彼によりて建築せられたるを見るに及びて、彼等は其時代に於ける第一流の一美術家としてレスコを認むるの餘義なきを致し、遂にフランソワ第一世がシャルル五世のルーヴル宮の場所に新ルーヴルを建設すべく彼に任じたるを見ても、之を驚奇するものあらずなりぬ(千五百四十六年)。此工事は辛くもフランソワ一世の崩去せる時に於て着手せられき。されど美術的に鑒識に富み、且つ忠實なる斯道庇護の念に篤かりし一世王の義女によりて此美術を世に示すことを得るに至れり。カテリンヌドメデイシの政治的罪過は、以て彼女が佛蘭西に於ける其祖ロラン威王と伊太利なる其叔父レオ第十世との傳說を、其成功の下に續けたりしことを承認するを妨ぐべからざる也。彼女は等同の感想を以て文學と美術とを結合したり。チユイルリーが建築最中の時に於けるロンサールはカテリンヌドメデイシに續きて其宮殿に立ち入らんとしたりしものから、此詩人ロンサールの爲めに各處に於て其著作を飜弄嘲笑されたりしフイリベールツロルム(千五百十五年—千五百七十年)は、彼に對して其戶を封鎖せりき。斯くと聞きたる女王は、其建築家に激烈なる非難を加へぬ。即ち彼女は全廷に響けとの聲張り上げて絕叫すらく『チユイルリーは、ミユーズの神々に捧げられたるも

のなることを心せよ』と。

チュイルリーの建築に展開せられたる活動は、何故にルーヴル宮の工事が、爾かく千五百六十四年頃より更に緩運徐歩にさるゝことを憚らざりしかを説明するもの。ピエールレスコは、爾來變改されたりしも猶其當時の人々が『殆ど全歐を通じて其第二のものを見ざるべき程に爾かく秀絶したる對象と及び美とを以て、且つ有らゆる種類の建築によりて華麗にせられたり』と云へりし處を想見し得べき西方の正面を建設したるのみなりし也。要するに彼れカテリンヌは、レスコとツロルムの生時とよりして既にチュイルリーの其宮殿を、ルーヴルなる王居と連樓せしむべく企圖しつゝありたるなりき。ピエールシャンピージュは、ルーヴル宮とセーヌ河との中間なる小歩廊を竣へ、又レデイギエール角樓下層の工事を成しぬ。

いてやフイリベールツロルムに歸りて云はんか、彼の作たるチュイルリーとムウドンとは破壞せられ、只僅にアチの一部分を存ぜられたるのみなれば、今日に於て彼の才能如何を判知せんは難事に屬す、されど吾人は、其

宗教的建築、エクトルソイエ、

如何なる建築家も彼以上に理論と實際とを結合するの智能を具せりしものゝあらざりしことを忘るゝ能はざる也。彼は高尚なる理會に向つて身を持重し、又ヴイットリユウヴなる規則と主義とのまゝ、古代の實例に基く五圓柱式の一般建築規則を記述したりもの(千五百六十八年)亦、少許の費用にて善良なる建築をなす新發明をも刊行したりき。其著「建築術の規約」全書中に於て、彼は其最も心すべき處のものゝ一を、截石方式の規約となし終に彼が一大進歩を以て實現したりし建築用材の一システムに自己の名を署しぬ。

○チュイルリー宮が建築せらるゝ當時に於ける宗教的建築術は其紀念物に對し、依然として屢々ゴチック式に存したりき。全然新式もて建立せられたるエクウアンの如きシャトオにありても、其禮拜堂のみは猶ほオジヴアル的たりし也。ボオヴエーなるサンピエールの頌歌堂は、千五百五十五年に竣へらる。其十字形部は小ジャンウアストとフランソワマレシャルとによりてピラミット形に終成せられ、オジヴアル式の穹窿にされたる方

塔を冠せられぬ。此方塔は、地上五十メートルなる其尖塔の頂邊を、側堂舗石の處より透見せしめたりしが、此塔は千五百七十三年に於て破壊し了れり。爾來建築物の設計と、及び概してシスラムとに合したる此新嗜好は、誤りて其全躰をミケルアンジエロの弟子ユーグサンバンに歸せられし作物たるサンミケルドデイジョン、明かにノートルダムを摸擬せるピエールルメルシエをダヴイッドとの作品たる巴里のサントユスタージユスタージユ寺院、及び千五百三十四年の禍害が、端なくも建築家フローレンス人ドミニック、フォルショオの兄弟ゼラールとジャン並にフランソワジャンチルに、多くの工事を與ふるに至りたりし其多數なるトロワイユの寺院等に現はる。されど此時代に於ける宗教的建築物の傑作は、眞箇新的の性質を具有しつゝ、最も纖麗なる嗜好に結合せる其稀有的想像力の豐富を證する處のものたる、彼のエクトルソイエ(千五百二十五年頃)の作にかゝるカアンのサンピエールの奥堂即ち是れとなす。彼れソイエの指揮になれるものには、あらざれども、而も其派に屬すべきものに、有名なる美術嗜好者ジャンアン

彫刻、ジャンカウジョン、ヨンセルメンヒロ、ピエール、ポンタン、

ゴの出費によりて建成されたるディエップのサンジャックと、フェルラベルナールなる聖母の頌歌堂とあり。

此等の種々なる建築に於て、其固有に云ふ處の穹窿に代置すべく、一新式の採用されたれしを見る。ゴヂック式穹窿の隆起線は保存せられたるも其彎曲上に直接泥工を受くる代りに、輕く曲れる石の天井を構成する、殆ど水平なす石壘みを支持したり。天井は眞の石細工たる、其懸垂せる拱心石にて飾られたりし豐富なる彫刻を以て蔽はる。此華麗は、吾人に數多の典型を呈するチリエールの寺院(ウール)と、ベランなる寺庵の穹窿のシステムとに於て、却つて能く適用せられぬ。此處には既にオジーヴの十字架を存せず。隆起線は其起點に於て半減され、中心斜方形の周圍に、三角形篏板のシステムを形成するに至れり。斯くて天井は一種の石的網狀組織によりて支持さる。第十六世紀は數多建設したりきと共に、不幸にして又數多破壊せられたりしなりき。

佛蘭西の彫刻家は、少くとも其建築家と好箇の比肩をなせり。ツールに住し

つゝ、其主なる品作が、吾人をしてサンズニなるルイ第十二世の墳墓なる、其王と女王との臥せる肖像に於て、實に奇異なる寫實主義の細密を觀察せしむる處のジユスチなる伊太利の一家族は、其式によりて大部分佛蘭西派に屬す。ボンストレバッチは勿論、ベンヴエヌトケリニ其人と雖も、ジャングウジョンと及び其同時代に於ける佛蘭西の最優者とには及ぶべくもあらざりし也。

○吾人は今茲に、千五百十五年の頃生れたりしジャングウジョンが、サンバルテレミイの犧牲者の一人たらざりしことを知んぬ、されど其千五百六十三年に居住しける伊太利のボローギユに於て、千五百六十八年の以前に死したりし也。彼は最初ルアンなるサンマクルウの戸の作に從事し、遂に巴里に來りて其友ピエールレスコにより其督せる種々の事業に、使役せられぬ。彼は就中凸彫刻をなしたりしも、(「アチのディアーンヌ」(ルーヴル)今や古代彫刻博物館の第一室なる、カルドの舊室、人像柱」は、大容積なるに拘らず、其肖像に彫刻のコルレジオと綽名せしめたる處の虛飾なる雅麗を保たしむるの智能を示せり。

ジャングウジョンは又其纖細と雅致とに滿ちたる半身像を作りたりしも此點に關しては彼よりも變化に富み、又恐らく彼よりも堅實なる才能を有せるセルメンビロン(千五百三十五年?—千五百九十年?)によりて制御せらる。

○レチドビラーグの銅像と、其妻ヴアランチンヌバルビアニの大理石像とは、佛蘭西派の最も表情的なる彫刻中に算せらる。權勢赫々たる大臣の妻は、其齡の力と明著なる態度とに半ば臥しつゝ、當代の富贍にして複雜なる衣服に蔽はれながらに表はされぬ。美術家は其下に老と死とに衰耄されたる同一の人に、纖かに彼女を包める葬衣中に表示せる凸彫刻を配したり。彼が其對象を鋭敏ならしめんが爲めには、何等の細密も、如何なる酷烈なるものをも辭せざりしが、而も此顏はよし不動にされ、其眼は光彩せりしものなりきとするも朝廷夫人のそれにも優りたる高き品位を有す。されどビロンの最も世に知られたる作品は、「三つの愛」の名の下に表示されたる取合せにして、其三個の女性が支持すなる水瓶は、カテリンヌドメディシの心を包在するに充てられたりし也。

彼はフイリベニルツローム の設計に準據しつゝ、フランソワ第一世の墳墓の作に從事したり、されど其最大部、即ち下部の凸彫刻と肖像とはピエールボンタンに歸せり。王の治世間に於ける大勝利を表出せる凸彫刻(マリギャン、ゲリソールの勝利)は、近世美術の傑作に算入せらるゝもの也。ピロンは又ボレスジャック、ブルマンルウセル及びローランルギヨールダンと共にレスコが其建築者たりし處のアリン第二世の墳墓の作に寄與したりき。

第四十二圖

ピロン作—三つの愛

地方の諸派

○地方の諸派は巴里に於て其作に從事しける彫刻家と對抗せり。ルアンにありては、彼のブールテルールド館の凸彫刻、次て其カテドラールに對して恐らくグウションが從事したるやに思はるゝルイドブレゼの墳墓と、デソールボオ、デルウアン及びアンドレエルマランノに援助せられし處の其、ロランルルウの作なるアンボワズの兩僧正の墳墓とを見る。ノルマンディ派には、吾人其全レテッサンスの時代を包容する「ソレスムの聖者」てふ名の下に知られたりし取合せの有名なるセリイを屬せしむ。「基督の葬送」は千四百九十六年のものにして、「聖母の禮拜堂」は千五百五十三年のものたり。此禮拜堂は殆ど八十の肖像若くは半身像を藏す。殊に吾人は此處に「氣絶」「葬送」「昇天」を賞讃すべし。ラングドックに於てはバッシュリエ(ダルバードの正門)の名によりて知られ、リムウザンにありては、吾人特に其フローレンスに一大名聲を享けたりしジャックダングウレームの作なる、リモージュのカテドラールのジエベと、ジャンドランジャックの墳墓とを擧げん。ローレンヌにては、ミケルアンジエロを師としたるレジエーリシエがサンミケルの「墳墓のミーズ」と「基督の磔刑」とに其師の遺風あるものを傳へ、ピカルゲイにては、ジャントリユバンがアミアンの自在椅子の作を遂へたり。イルドフランスにては、フイリップボが、ボオヴエーの南の戸を彫し、フランソワマルシャンが、シャルトルの頌歌堂の圍柵を續けぬ。されど此等地方中

ジャンクウザン

に於ての最も著しきものは、ジャンクウザン其人即ち是れ。

ジャンクウザンは千五百年に於てサン附近のスウレイに生れ、千五百八十九年に死せり。世人はルーヴルの主要作品たる「提督シャボの肖像」を彼に拒むと雖も、而も彼は依然として其時代に於ける第一流の佛蘭西繪畫家たる也。吾人は今日就中其玻璃畫によりて之を判知するに難からず。此種の繪畫は、其殆ど全く退滅し終らんとする際に於て傑作を出しぬ。サンジエルヴエー（ミケルアンジエロを模したる「サンローランの犧牲」）、サン（「オーギユストと笠女」）、ヴアンサンヌの禮拜堂（「ジョゼフの傳說」）なるクウザンの玻璃畫、サンメリイ（「最後の判決」）、巴里のサンジエルヴエー、シャルトルのサンペールなるピネーグリエの夫れ、サンのカテドラールなるクウザン其人の師たるジユアンドサンのそれ、オーヤのカテドラールなるアルノールドモールの夫れ、此等と稍類似せるモンモランシイの寺院、ムウランのカテドラール、エクウアンの禮拜堂及びシャンチリイの玻璃畫等は、玻璃畫としての其固有の性質を轉ぜしむるの非難を價し始めたり、されど其もの自身を見れば、此等の總べて佛蘭西派中に於ける最も主要なるものとし算せらるゝ變化に富める豐富なる組合せの作品たり。今やクウザンが、シャンボールに作りたりし壁畫を存するのみにして、其眞正の畫は極めて稀有のものに屬す、（メイヤンスなる「十字架よりの降下」、サンなる「エヴアプリマバンドラ」及びルーヴルなる「最後の審判」等）。

繪畫、クルウエ家、

要するに佛蘭西當時の繪畫は、他の美術の側にありて、平凡なる地位を取りつゝありたり。其最も著しき人物は、白耳義より出でたるクリウエの一家是れ也。此一家は畫家よりも寧ろ製圖家たるケスネル、フウロン、及びジユムウチエの屬すなる眞の一派を起しぬ。クルウエ家の最も有名なるジユアネと呼ばれしフランソワクルウエ（千五百年―千五百七十二年）は、世にも稀有なる纖麗にして、フランダー派の精密に佛蘭西派の雅致を遺憾なく加味したる寫眞畫を殘したり。「エリサベスドートリッシユ」の寫眞畫は、サンカレーの名譽を價せりき。

製陶、パリツシイ、オツロンの製造品、

○佛蘭西の美術家が、其組合せの天賦を缺如せりてふことの大に非理なりし所以は、吾人既に之を玻璃畫に於て證しぬ、今や吾人は之を工藝に於て認知すべし。第十六世紀は、其形狀と裝飾とに對して、佛蘭西製陶の最美なる一

時期たり。ペルナールバリッシイ(千五百十年—千五百八十九年)の名は、人口に膾炙する處、是れ其粗的小像よりは科學的思想に對して、より多くを價する處の一人物なりとす。其陶器や、作者が實に峻嚴する注意の下に秘法を固守せるものから、佛蘭西工藝の上に於て大なる活動を有せざりき。舊くは「アンリ第二世陶器」と名稱されたる、品かく世に稀有する作品が、永く考古學者の鋭敏を試みたりし、其オワロンの製造所は、殆ど四十年程よりは存續せざりし也(千五百二十九年?——千五百六十八年?)。此製造所は佛蘭西製造所中の最も本原的のものたり。フイロン氏は、此製造所がツアールに近きオワロンの其城下に生れたる、エレーヌグウフイエによりて起されたりしとの説を立てぬ。エレーヌグウフイエは、自ら其死に至る迄(千五百三十七年)其事を督したり。最初ルアンは伊太利の勢力に感化せられたりしが、轉て伊太利人を凌駕すとまでにはあらざりしかども、優に其比肩者となり、却つて其典型を伊太利人に供すべく些の躊躇だもあらずなれりき。其最も著しき養陶者は、當時陶製瓦を以てエクウアンの城を外飾したりし

金工、唐木匠

ミケルアバケスンヌとなす。茲に又其多數が、フエルリエールの城に保存せられたりし段階狀博風と共に、プレエドージュの建築的陶器を擧ぐべし。○佛佛西の金工は、少くとも他の美術と同一の賞讃を價す。ロベールブールゴニエール、ジャックエヴアン、ジャンデルヴオー等に關しては、殆ど一も存するものなし。吾人はより能くブリオ、ウイリオ、エチエンヌブローヌ、及びヴラヘイエ等を知り、此等の作は中世よりは其形狀に於て遙かに單純雅美にして、而もまた一大富贍なる裝美あるものを含めり。シャルル九世の甲と楯とは、其七寶ある金の服、アンリ第二世のと云はれたる甲冑と共に正しく驚嘆すべきの作たり。之と同一の優拔なる性質は、ノルマンデイブルターギエ、ブールゴーギエ、リオレ、オーヴエルギエ、ツールーズ、イルドフランス等の諸派に區別し得らるべき唐木匠の作品に現はれぬ。ビユランとジエセルソオとの如き建築家は、唐木匠に典型を與へたり。要するに服狀其物が、其誇大に落ちざりし時に於て、之を圍繞するなる總べてと好箇なる調和をなしたるなりき。

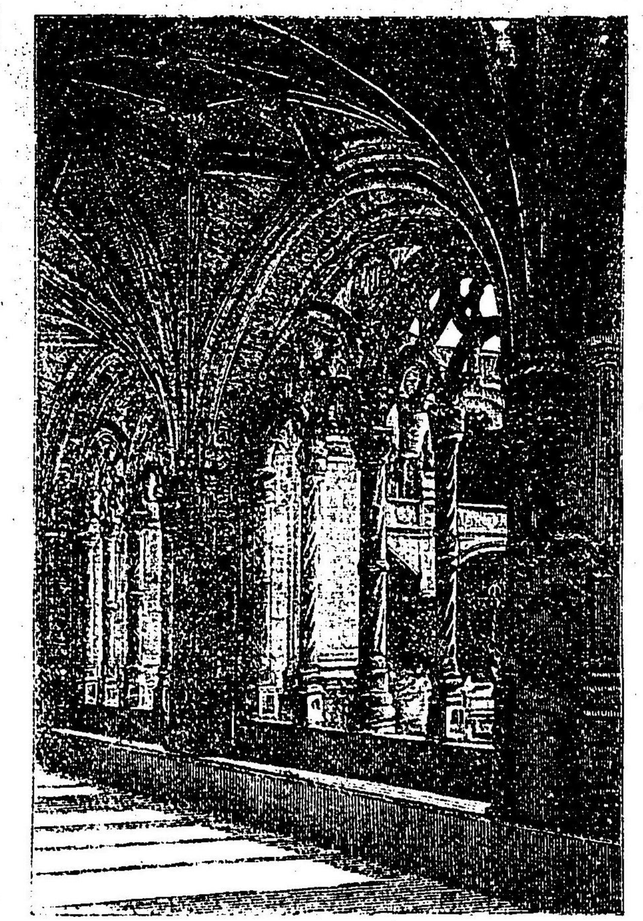
英吉利、チューードル式、エリサベス式、

西班牙と葡萄牙、プラテレスク式とマテノレセ、ヴエイルン式、ムクルシベ、クラレ式、ベルツレ、ゲクツト、

○政治的の順序に於て、他の歐洲諸國と區別ずべく、猶爾かく十分にカトリック教義と絶縁すべかりし英吉利は、而も他の列國より久しく古代の建築を保守したりし也。チューードル式に次て來りたりしものはエリサベス式にてありき、而して此式もまた、よし伊太利に於て研究しける其主たる建築家ジョンシユースと門人ソープ及びスツスソンとが、此處に或クラシック的分子を齎らしたりしにもせよ倫敦なるチャプターハウスのカレッヂカーバイの城等尚加減されたる一のゴチック式に過ぎざりき。

○されど回々教式分子を混和したるゴチック式は、第十六世紀の後半に至る迄、依然として其使用を持續したりし西班牙に於て、此世紀の後四分の一時代より建築上の一新式を現出せしめたり。倏忽として西班牙に貴重なる材料の著しき量を投ずるを致せる亞米利加の發見は、金工に一大發展を寄與しぬ。彼等は此等の富源を製作して、以て美術的作品となすべく其典型を伊太利に資借せり。爾かく屢々金工によりて摸倣されたる建築は、却つて其嘗ての摸倣者を摸擬するに到り、茲に則ちプラテレスク式を有することゝはなれり(プラー銀―プラテロ―金工)。其特徴ある例は、之をサラマンカのサンドニンゴ寺院、佛蘭西人フ、イリップヴガルニイのブルゴスに於

第四十三圖



ベレムの寺廊(プラテレスクス式)

ける作、及びセヴイル市廳の正面に見るべし。

當時夫れと同樣なる式は、突然亞米利加と印度との其殖民によりて富まされたる葡萄牙の地を支配したり。彼はマノエリン式てふ名を受けぬ(エンマヌエル王の名)。此王はガマの遠征的成功を表彰せしめんが爲めにプウタカ、カスチロ及びニコラスと稱したる佛蘭西によりて、此種の傑作たる壯麗なる一寺院をベレムに建築せしめき。

裝飾的同一の過重、同一の非常なる耐忍は、肖像製作に存したり例へばグラナダなるカテドラールの葬儀的紀念物(「フエルディナンド」「イサベラ」「フイリップ麗王」「ジャンヌラフォルの墳墓」)等に於て之を見る。吾人はまた西班牙に於て、一般例外の容積たる祭壇後部の裝飾を表記し得べく、而して其時代に於て最も著しきものは、エスラバン、ジョルダン及びベセラの作にかゝるアストルガの夫れ、ダミアンフォルマンの作なるメディナデルリオセロの夫れ也。彫刻者中にありては、就中千五百七年より千五百十二年に亘りてブルゴスの慫嘆すべき寺院の自在椅子を彫刻し、又其補助者としてアロンゾベルゲットを有したりしトレードの夫れに從事したる處のラングルの出なるフイリップヴイカルニイあり。されどベルゲットは殊に最もキシメチスが既に庇護したりしクラシック嗜好を普及することに寄與したりき。ベルゲット(千四百八十年—千五百六十一年)は、其時代の最大なる西班牙美術家にして、伊太利なるミケルアンヂエロの弟子となり、且つ其師の如く畫家にして彫刻家を兼ねたる建築者たり。彼はシャルルカンの爲めに、グラナダの宮殿(アラムブラ)と、トレードの新アルカザールとをグレコローマン式にて建築したり。

○西班牙繪畫は、其後世子孫が保存しける、ヴイセントジョアネス(千五百二十三年—千五百七十九年)、フランシスコリバルタ(千五百五十五年?—千六百二十八年?)、ゼウールの派祖なるルイドヴアルガス(千五百二年?—千五百六十七年?)、フエルディナンドカトリック王の常侍畫家たりしリンソン(千四百四十六年—千五百年)、アロンゾの父ペドロベルゲット(マドリット博物館のオートタフア)、畫家にして刻彫家、建築家にして學者、兼ねるに語學

繪畫、ナヴアレット(ユルムド)

者たり詩人たりしケスペデス(千五百三十八年—千六百八年)、フイリップ第二世の寵遇を蒙りたる畫家サンケコエロ(千五百十五年—千五百九十年：王家の寫眞畫、エスキリアルの繪畫)、コエロの友にして且つ其匹敵者たるクルッツのバンタジョ(千五百五十一年—千六百九年)、エルデイヴイノの綽名に價したりし基督教徒と美術家との熱誠なる心のモラレス(千五百九年—千五百八十六年……マドリッドなる「四柱の基督」、及びエルムド(啞者)と綽名されたるナヴアレット(千五百二十六年—千五百七十九年)の如き人物を示せり。此畫家ナヴアレットは、美術史上に於ける一奇物とせらる。彼は生れ得て聾啞なりしも、甚だ若くして其美術家の癖疾を自らの口實となすべく、何等の要をも有せざりし程の一大才幹を抱持するに至りぬ。彼が伊太利に於ての課業を索求したりしチチアンの勢力感化を認むべき其畫額(エスキリアルの「ランジャックの犧牲」、「降誕」等)は、當時伊太利以外に於て作出されたるものゝ最優秀中に算數せらるべきもの。ナヴアレットは西班牙に於ける最も顯著なる一畫家たり、されど眞に西班牙派が漸く形成せらるべかりしは、次の世紀を俟たざるべからざりし也。

斯くて中世美術の幕は閉ぢられぬ。若し次期の開演に於ける其光景の如何に至りては、請ふ『近世美術史』上に之れを詳記せんかな。

世界美術史下卷終

明治三十八年四月十四日印刷
明治三十八年四月十七日發行
（定價金四拾錢）

編者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　小川銀次郎
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市京橋區四綉屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區四綉屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

著作權所有

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

世界美術史下卷並製

帝國百科全書の發行は我國出版界に於ける實に空前の大事業なり、曾に卷帙の浩瀚なるが爲めにあらず其內容に於ても然りとす、其全編の著者は悉く

當代第一流の博士學士、述作する處は皆專門の科目、

政治、經濟、法律、文學、理學、工學、農學、林學に亘り、方今世界の思想界と物質界とに於る總進步發達せる理論と事實とを網羅す。

彼の大英百科全書が世界に於て萬種の事物を最も完全に網羅せる圖書とせば、帝國百科全書は少くも日本帝國の「エンサイクロペヂヤ」なり、而かも彼れは全部の價貳百圓許にして此れは全部二百卷の價僅かに六拾五圓のみ、蓋し卷帙の浩瀚と內容の精選とと學科の具備とに加へて其代價の比較的廉なることに於て古今無比なるべし。宜なり本書が嘖々たる世上の高評を博し、每卷皆數版乃至十數版を重ぬることや、今や豫期の順序に因り其百廿餘編を發行するに至る、且別に醫學新書、商業叢書、工業叢書等各專門の全書を發刊せりと雖も、社會の進步は更に各學科の微細に入り、日に進み月に磨き、分類に加ふるに分類を以てし、猶向後刊行する所の本書に待つや少なからざるものあらんす、本館益々奮つて之か完成に勗め、以て能く社會の森羅萬象は、盡く網羅して遺憾なからんことを期す。

每月二回刊行　每卷紙數約三百廿頁　全部二百卷　總紙數約六萬五千頁

正價

並製

洋裝（大判並製）

- 全部二百冊　六拾五圓
- 百五拾冊　參拾七圓
- 廿五冊　四拾八圓
- 十一冊　參拾七錢

郵稅　一冊八錢宛

特製

洋布金字文美本

- 全部二百冊　八拾八圓
- 百五十冊　四拾五圓
- 廿五冊　貳拾貳圓
- 十一冊　五拾五錢

郵稅　一冊拾錢宛

帝國百科全書分類目錄

●印は既刊の分
○印は續刊の分

文科

- ●世界文明史　文學博士　高山林次郎君著
- ●日本文明史　文學士　大町桂月君著
- ●支那文明史　文學士　大町桂月君著
- ●東洋西洋倫理學史　文學博士　井上哲次郎君　文科卒業　木村鷹太郎君著
- ●東洋西洋教育史　文學士　中野禮四郎君著
- ●支那文學史　文學士　笹川種郎君著
- ●支那法制史　文學士　淺井虎夫君著
- ●世界宗教史　文學士　加藤玄智君著
- ●西洋哲學史　文學博士　蟹江義丸君著
- ●支那哲學史　文學士　中內義一君著
- ●日本佛教史　文學士　石原即閑君著
- ●日本儒學史　文學士　久保天隨君著
- ●日本風俗史　文學士　阪本健一君著
- ●西洋歷史　文學士　吉國藤吉君著
- ●東洋歷史　文學士　幸田成友君著
- ●日本歷史　文學士　木寺柳次郎君著
- ●邦語英文典　文學士　畔柳都太郎君著
- ●邦語獨逸文典　文學士　青木昌吉君著
- ●邦語佛蘭西文典（上下二冊）　文學士　松井知時君著
- ●邦語獨逸文章論　文學士　青木昌吉君著
- ●日本文典（上下二冊）　解說批評　文學士　岡田正美君著
- ●修辭學　文學士　武島又次郎君著

●日本法制史　文學士　淺井虎夫君著
●近世美學　文學博士　高山林次郎君著
●世界美術史(上下二冊)　文學士　小川銀次郎君著
●比較神話學　文學士　高木敏夫君著
●哲學汎論　文學士　藤井健次郎君著
●宗教哲學　文學博士　姉崎正治君著
●心理學　文學士　速見滉君著
●兒童心理學　文學士　松本孝次郎君著
●倫理學　文學博士　蟹江義丸君著
●論理學　文學博士　高山林次郎君著
●教育學　文學士　熊谷五郎君著
●社會學　文學士　十時彌君著
○日本文章史　文學士　大町桂月君著
○佛教哲學汎論　文學士　石原即聞君著
○宗教進化論　文學士　融道玄君著
○西洋音樂史　文學士　石倉小三郎君著
○世界文學史　文學士　橋本忠夫君著
○英國文學史　文學士　藤澤周二君著
○獨逸文學史　文學士　中村鄧次郎君著
○朝鮮史　文學士　久保天隨君著
○近世儒學史　文學士　久保天隨君著
○近世美術史　文學士　小川銀次郎君著
○史學　文學士　阪本健一君著
○進化論　文學士　十時彌君著
○認識論　文學士　藤井健次郎君著
○社會倫理學　文學士　德谷豐之助君著
○普通教育學　文學士　小西重遠君著

理科

●新撰算術　理學博士　高木貞次君著
●新撰代數學　理學博士　高木貞次君著
●新撰幾何學　理學士　林鶴一君著
●新撰三角法　理學士　松村定次郎君著
●新撰微分積分學　理學士　松村定次郎君著
●新撰解析幾何學　理學士　林鶴一君著
●日本新地理　理學士　佐藤傳藏君著
●萬國新地理　理學士　佐藤傳藏君著
●地文學　理學士　吉田弟彥君著
●星學　理學士　須藤傳次郎君著
●地質學　理學士　佐藤傳藏君著
●有機化學　理學士　龜高德平君著
●無機化學　理學士　眞島利行君著
●植物學新論　理學士　飯塚啓君著
●新撰動物學(上下二冊)　理學士　會田龍雄君著
●新撰應用重學　理學士　刈谷他人次郎君著
●近世氣象學　理學士　岡田武松君著
●保險通論　理學士　奥村英夫君著
○地震學　理學博士　大森房吉君著
○人類學　理學博士　坪井正五郎君著
○測地學　理學士　芦野敬三郎君著
○鑛物學　理學士　大築佛郎君著
○普通物理學(上下二冊)　理學士　久茂桑君著
○近世幾何學　理學士　藤田外次郎君著
○實用定量分析術　由來國學專門學校教授　須田勝三郎君著

農科

- 農政學　農學士石坂橘樹君著
- 農學汎論　農學士恩田鐵彌君著
- 栽培汎論　農學博士横井時敬君著
- 栽培各論　農學士田中節三郎君著
- 肥料學　農學士木下義道君著
- 黴菌學　農學士井上正賀君著
- 農業經濟學　農學博士横井時敬君著　農學博士澤村眞君著
- 農產製造學　農學士楠巖君著
- 農用器具學　農學士西村榮十郎君著
- 農藝化學　農學士井上正賀君著
- 日用化學　農學士井上正賀君著
- 衛生化學　仙臺醫學專門學校教授須田勝三郎君著
- 畜產汎論　農學士高見長恒君著
- 畜產各論　農學士田口晉君著
- 園藝通論　農學士高橋久四郎君著
- 園藝各論　農學士高橋久四郎君著
- 植物病理學　農學博士大森順造君著　農學士山田玄太郎君著
- 植物營養論　農學博士稻垣乙丙君著
- 稻作改良論　農學博士横井時敬君著
- 氣候及土壤論　農學士佐々木祐太郎君著
- 家禽學　農學士月田藤三郎君著
- 水產學　農學士坂本道遠君著　農學士井上正賀君著
- 食物論　農學士井上正賀君著
- 提要造林學　林學博士本多靜六君著
- 森林保護學　林學士新島善道君著
- 森林學　林學士奥田貞衛君著

- 獸醫學汎論　獸醫學士小倉鉀太郎君著
- 農業植物學　農學博士大森順造君著

法科

- 法律汎論　法學士熊谷直太君著
- 法學　法學士丸山長渡君著
- 理學　法學士岸崎昌君著　法學士中村孝君著
- 國法學　法學士北條元篤君著　法學士熊谷直太君著
- 國際公法　法學士中村太郎君著
- 國際私法　法學士上田豐君著
- 民法親族編相續編釋義　法學士丸尾昌雄君著
- 民法總則編物權編釋義　法學士丸尾昌雄君著
- 民法債權編釋義　法學士丸尾昌雄君著
- 民事訴訟法釋義　法學士梶原仲次君著
- 刑事訴訟法論　法學士溝淵孝雄君著
- 行政法汎論　法學士小原新三君著
- 行政法各論　法學士小原新三君著
- 世界宗教制度論　法學士工藤重義君著
- 日本帝國憲法論　法學士田中次郎君著
- 商法汎論　法學士添田敬一郎君著
- 商工地理學　法學士永井惟直君著
- 政治地理學　法學士山本信博君著
- 政治汎論　法學士永井惟直君著
- 政治史　法學士森山守次君著
- 議會及政黨論　法學士菊地學而君著
- 議院法提要　法學士工藤重義君著
- 行政裁判法論　法學士小林魁郎君著
- 財政學　法學士笹川潔君著
- 商業經濟學　法學士清水泰吉君著

ヨ2N93

帝國百科全書

博文館發兌　全部二百冊

●經濟汎論　法學士　池袋秀太郎君著
●銀行新論　法學士　野口弘毅君著
●金融論　法學士　佐々木雄次郎君著
●工業政策　法學士　窪田隆次郎君著
●最新統計學　法學士　夏秋龜一君著
●最近外交史　法學士　原田豐次郎君著
●世界殖民史　法學士　山內正瞭君著
●露國侵略史　法學士　須崎芳三郎君著
●現代露西亞　法學士　須崎芳三郎君著
●稅關及倉庫論　法學士　岸崎昌君著
●運送法　法學士　菅原大太郎君著
●船舶論　法學士　赤松梅吉君著
○經濟政策概論　法學士　守屋源次郎君著

○家事經濟學　法學士　河津遐君著
○日本經濟學　法學士　柳田國男君著
○政治學史　法學士　津田欽一郎君著
○新刑法論　法學士　島田鐵吉君著
○英米法　法學士　永井亨君著
○獨逸法　法學士　宮內國太郎君著
○國家學　法學士　南弘君著
○社會政策　法學士　小野儀一君著
○殖民政策　法學士　兒玉秀雄君著

工科

●分析化學　工學士　內藤光藏君著
●應用化學　工學士　蜂屋貞輿君著
●應用機械學　工學士　重見道之君著

帝國百科全書發刊當時の計畫は全部一百冊を以て完結の豫定なりしも出版進行の結果各科必要の科學多くして豫定の卷冊に到底網羅し難きを以て其將來を發刊して其內に出版したるものを中途に分割し一は醫學新書一は工業叢書然れ共尙各科其半にして既に一百冊に滿ちたるを以て本館は更に一百冊を續刊するの盛運に到りぬ是續刊一百冊は每月一回若くは一回出版して來る明治四十年我館創立滿二十週年に達するの時までに完成すべし。

78
3